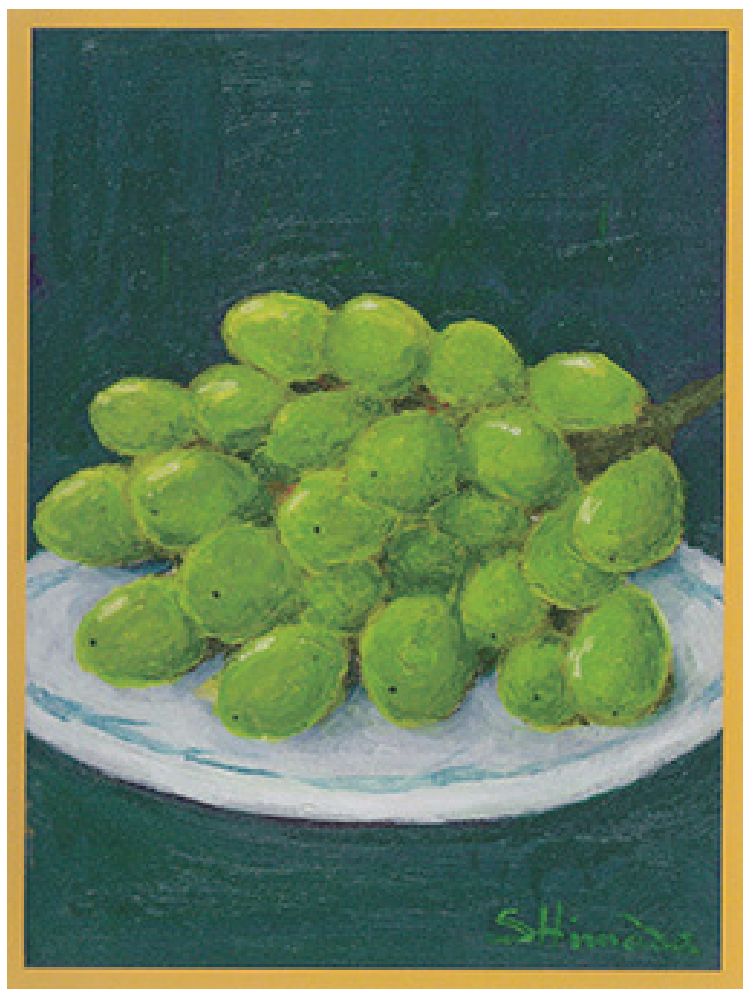


冬 雷

短歌雑誌

TOURAI



二〇二六年六月一日発行（毎月一回一日発行）
第六十五卷第六号（通卷七二号）

6月号・2026年

応接室……新作五首

将門の井戸―我孫子市―

五十嵐順子



わが町の将門神社 朝日受け椿の落花掃く人のあり

「将門の井戸」に水なく草むせる窪みに春の花びらが降る

手賀沼を騎馬に渡りし遺臣らがここに休みて水汲みし井戸

切り口の家紋に似れば瓜は植えずと町の古老の将門鼻肩

「乱」と言われ「討伐」と言わる 権力の側
に立たざる者らは史書に

〈歌と観照所屬〉

2026年6月 目次

〈応接室……新作五首〉……………五十嵐順子…

冬雷集……………1

作品一……………24

六月集……………38

作品二……………44

作品三……………56

歌集 / 歌書御礼……………編集室・佐藤靖子…16

真野少歌集『山葵の花』を読む……………桜井美保子…18

四月号冬雷集評……………桜井美保子…19

作家と編集者の微妙な関係……………高橋輝次…20

四月号作品一評……………小林芳枝・藤田夏見…22

四月集評……………鈴木やよい…37

四月号作品二評……………井上菅子・江波戸愛子…42

四月号十首選（冬雷集・四月集）……………52

四月号十首選（作品一・作品二・作品三）……………53

四月号作品三評……………山本三男・橘 美千代…54

大友柳太郎歌集『渚』鑑賞 補記③……………大山敏夫…62

表紙絵《シャインマスカット》嶋田正之 / 題字 田口白汀

冬雷集

川越歌会

小林芳枝 東京

土曜日の池袋駅混み合へる通路に並ぶ菓子屋の outlet

東上線の西改札口に待ちをれど気付けば幾つも改札がある

たぶん近くにゐる筈なのに会へなくてスマホ持ちつつ身の熱りくる

ぎりぎりの発車時間に間に合ひて急行電車の座席に並ぶ

ゆみばあちやんと孫に呼ばれる倉浪さん静かなこゑで会を進める

柚子ジャムを手づくりされる野崎さんゑがほで会費集めてまはる

初めての顔なつかしき顔円形に座りて向かひあふ友のかほ

語り合ふやうな思ひになりながら歌を読み合ふ作者とともに

顔合はせ声交したる歌会の続きのごとく夜を帰り来る

赤間洋子 東京

失敗は歳相応と言はれるが諦められず悩む日々なり

一人暮らし淋しと思ふことなけれども外出せねば終日無言

卒業式に教へ子より手渡されしフリージア同じ品種がプランターに咲く

あの子らの両親は我と同世代介護必要と言ふ者もをり

物忘れひどくなりきて失敗するが他人に迷惑かけねば良しとす
シルバー体操視力聴力衰へたれば常に前列師の前に立ち
今日の体操若き先生担当で厳しき指導に悲鳴をあげる

兼 目 久 栃木

渡辺卓夫コンサート高らかに駅の一角響きてゐたり
菜の花を日々取りて煮たり食ふ冬の真つ盛りそぞろ楽しむ
大地震がたかたゆれて茶の間には茶わん等ゆれて収まる
大地震起きて物がゆれるたび恐怖にさらされじつと動かず
開花まであと数日を要すと告ぐるなり三月末日アナウンサーは
ひたすらに一球を追ひ情熱をかたむけ高校球児をどる
桜咲く開花の時期は三月二十五日前後と決まりし五十年前
両側の舗装道路に植ゑてある桜の花は伸びてくつつけり

森 藤 ふ み 東京

高速道パトロール隊の黄の車角のスタンドに給油して行く
大手門をくぐり坂道上りくれば緑あざやか芝生の広場
新緑の芝生広場をひと回りしだれ桜の下に立ちたり
御衣黄の花はさみどり八重の花揺れ止まざるを素早く写す
汐見坂は急な坂なり足元を確かめながらゆつくり下る
一本のケヤキ大樹を囲むベンチ人多く居て座る余地なし

せかせかと歩き回れば休憩を取らずにみたど帰りて気付く

席順 櫻 井 一 江 東京

勝鬨橋通過途上のバスの中「東京タワー スカイツリー」と子ら叫ぶ
バス窓に寄りて声出す旅人か築地市場跡の大地を見つつ
首都圏のふるさと会は二年ぶり上京の市長ら挨拶次々
市長の弁ふるさと納税ありがたく念願施設の建設成りと
盛りなる桜に雨の冷ゆる昼ふるさと会出席の友の激減
消息も体調の良し悪し聞けぬまま友の輪徐々に解かるる現実
大方は高齢者の集ふ会場にすんなり馴染む我らが三人
教室の席順までも覚え居し友は五十音なりに我が後ろ席

有 泉 泰 子 山梨

春休み孫の誘ひに飛び乗りて父母の眠りある小平へと向かふ
中央線久しぶりなり懐かしや蒼空広がり「いつか来た道」
乗り継ぎの駅名なども飲みこんで迷ふことなく案内しくるる
父母眠る墓に大きな花束よどなたが来しか会ひてみたしよ
手みやげの餅菓ふたつを供へつつ孫と二人で亡き人々に会ふ

青 木 初 子 神奈川

入りつ日の暑さ遮る木斛の木下はシランの適地と思ふ
木斛の葉陰のシラン長年を五株のままに花咲かせをり

蕾もつシラン増えたり五株より今年は十ほど切り株回り
向ひ風に自転車振られハンドルを強く握りて平行保つ
ふた月ぶりバドミントンの練習に今朝は体の節々痛し
自転車の専用道路なき道は横すり抜ける自動車怖し
青切符切るより車の運転手のマナー向上願ふ弱者は

中 村 晴 美 茨城

花見ゆる園芸コーナーへ吸ひ込まれ予定外に苗三つ買ふ
更にまた通販にても苗を買ふ大きプランターに並べ配置す
未だ四月夏の日差しに温室の夏野菜苗を軒下へ移す
ホトケノザ畑の隅に咲いてをり陽気程よく作業の進む
トランプの始めし戦争じわじわと石油関連不足の予兆
補助金と備蓄放出に保たれしガソリン価格先行き怪し
未だやるか終りの見えぬ戦争にあらゆる物の値上げのさるる

橋 本 文 子 鳥取

桜咲くこずゑは高く晴れ渡り境台場白き灯台
暮れ残る空に桜が咲き映えて一人静かに見上げる若者
桜見る人ら次々訪れて桜の下をにこやかに進む
夕空を大きな翼横切りて高き所に青鷺止まる
青鷺はゆつくり大きな羽を閉ち松のねぐらに羽を休める

日本海の防風林の松並木青鷺たちは巣作りするらし

吉 田 綾 子 ☆ 茨城

心地好き南東の風に吹かれつつ桜の花びら芝生に惑う
早朝の雨に潤う出狸々巡りのみどりに真紅際立つ
異常なる春冷えつづき神仏に供えし生花しばしの映える
お花見に体調崩せし牧師さん「もう終わりよ」と声の詰まりぬ
筍の描かれるはがきに気を込めて「純ちゃんファイト！」と書き送るなり
厳冬の心配余所に皇帝ダリア夏日つづきに太き芽の立つ
夏日差す庭の木陰にシャガの花西側向きて群れて咲きおり
はてなと思ひ受話器を取れば「綾ちゃん！」と幼馴染の英子ちゃんの声

高 松 美智子 ☆ 栃木

熊よけのランドセルの鈴チリリンと山あいの村の黄色い帽子
濃き緑淡きみどり桜色三叢の山は春にかすめり
今朝は少し葉色が悪いと窓開けて風を通して陽に当てる鉢
水仙の蕾ほころぶ傍らに親指ほどに芽立てる芍薬
白内障の手術を終えたる友がまず「緑がきれい」と目を輝かす
それぞれのレンズを通して見る世界映る緑もそれぞれが色
稲荷神社の初午祭の賑わいはしんこまんじゅう露天の匂い
受験より解き放たれたる心地して初午めぐりし十五歳の春

不意打ちに友は告げたり年でなく月単位なる命であると
淡淡と残る命を言ふ友のメールにひとつ泣き顔スタンプ
メンバーの息のむ気配まで伝へグループラインはフリーズしたり
ふた晩の雨が一気に伸ばしたる若芽と思ふ牡丹の赤き
渋滞の高速バスに隣り合ふダンプのドライバーはカルピス飲みをり
血みどろの香港映画を平然と観られる吾になり果ててをり
二度三度ふり返りては手を振る兎こあ何年の見守り登校
核を持つ国が他国に核を持つべからずと言ふ言へるをかしさ

山口 嵩 福島

みちのくの信夫の里に春風の吹き来て悲し虎女の純愛
都へともどりし融は分かりてや悲恋のうちにゆきたる人を
さくら・なの花・れんげうを巡りて望む雪の吾妻峰
いつからか名所となりし花見山タガログ語米語そして日本語
県外のバスでうづまる駐車場福島ナンバーちらりほらりと
トランプの面子のための戦争に諸国の民の明日は闇へと
国情局国民会議改憲と戦前回帰の道は着々

酒向 陸 江☆ 東京
陶芸家三浦小平二展に行く町の誇りよ人間国宝

小平二の陶芸窯場は幼稚園の三階住居のテラスにありぬ
小平二の夫人園長先生とは戦友と呼び合う二人でありしと
無機質なコンクリートの美術館に三浦小平二の雅が並ぶ
アフガンを旅した時のスケッチが白磁の腕に描かれてあり
友と来て青磁の感動冷めやらす桜二分咲きの下を歩きぬ
小平二の碗を置きたる茶店にて抹茶一服所望をしたり
両の手に丸くずっしり小平二を押し頂いて至福を味わう

天野 克彦 大阪

わが庭のさくらの花は今年また咲きてくれたり見ればうれしも
わが街のさくら通りのさくら花いま盛りなり観る人なくに
レンタルの和服の似合ふ親子連れニホンの春を楽しむらしも(祇園社)
青い瞳めの少女の所作に驚きぬ手水てみづの作法を見事にこなす
手を合はせ何を願ふかしらねども異国の少女のすがた貴し
ひとしきり散りたる後はしづもりぬ祇園名勝枝垂れ桜は
円山の小橋のほとり温かや風に吹かれてさくら散るなり

大塚 亮子 東京

入学式終へて制服着たるまま母入院の病院に寄る
七人兄弟の末つ子なればわが制服は姉のお古を直して着用
末つ子のわが制服は母手直しの姉のお下がりがり

何処から飛ばされ来る花びらか白山吹を朝々に掃く
季節ごとに幾度来るや公園に友を偲びぬ昨日のごとく
嘗て友と弁当食べしはこの辺りかと親子の鴨の行列を見る
蘇る友の思ひで眼裏に公園を行く今日は一人で

カラス騒ぐ日

嶋田正之 埼玉

開き初む白木蓮に椋鳥の集団押し寄せ花びらを喰ふ
生ごみを漁るカラスの見通せる網被せたる中の食ひ物
寸の間に目と目の合へば首傾げ黒き眼に敵意のあらず
人影を認め飛びのき電線に行き過ぎるまで様子見て居り
卵の殻啞へ飛び去り屋根に食む今日金曜日カラス騒ぐ日
電線にとまり仲間を大声に啼き呼び寄する独り占めせず
己さへ良ければ好しと言ふ人を長に据ゑたる国の横暴
油資源奪ふ戦の続きをり孫の会社の船も渦中に
八十年争ひあらずのこの国の危ふさあれど九条のあり

江波戸 愛 子☆ 埼玉

桜まつり終えたばかりの並木道桜を見上げてあなたと歩く
お祭りの提灯残る並木道右も左も桜満開
人の声聞こえぬ朝の並木道あなたと歩くあなたの傍に
満開の桜のトンネル歩みゆくときどき頭上の花をみながら

並木道おおう桜の間より見ゆる青空その青まぶし
並木道おおう桜の花に寄る鳥の囀り一羽にあらず
目薬をつける習慣なき我に目薬つけよと処方箋でる
メガネ屋にメガネを求めにきたりしが右目の視力の弱さを知りぬ

橘 美千代 新潟

日々自分を責めてはこころ沈みゆく眠れぬ夜に浮かぶあれこれ
自律神経なだめるBGM流し脳の疲れとおちこみ癒す
かくも脆きメンタルなるか失望のつづき心の平衡くづす
娘とのビデオ通話に赤児ながめ笑ひ落ちつき取り戻しゆく
落ち込みの激しき時はパ音にて歌ふ「双頭の鷲の旗の下に」
昼下がりにかはか強風吹き荒れて咲きいそぎたる桜を散らす
副作用あるも効果の高き方か劣るも副作用少なきか迷ふ(母の再発治療抗癌剤)
副作用少なめといふ抗癌剤免疫チェックポイント阻害薬を母に

ブレイクあずさ☆ カナダ

薄笑い浮かべて為政者言い放つ戦争へ行け最後まで戦え
日本のテレビは映さぬ全国に広がる日本のデモの姿を
日本のデモは伝わる英語にてペルシア語にて中国語にて
「連帯」がソーシャルメディアの波に乗りソウルの街より今朝届きたり
光を手に立ち上がりたる人々を風は押し出す前へ前へと

今すぐにワタリガラスに身を変えて飛んで行きたし光の河へ
シオニストになりたる人との友情を夫は断ちたりイースターの朝
厨房の主の今日は寡黙なり隣近所のレバノン料理店
祖国より遠くにありて街に立ち歌うと決める「不屈の民」を

野村 灑 子 千葉

階ごとの端ともしたる小さき明かり空明け初むればみる間に消えたり
となりなる人がテールをたたき時書きものをする吾の手元の光飛ぶ
シート交換に同僚の悪口言ふ女達唇に人さし指押しあててゐる
八階のマンションを飾る街の灯は土の色あひみせて明けゆく
うす明かりの天上より灰色の小さきつぶて降りきて雪の粉に変はりぬ
想ひ出すたびくやしき事のたくさんありしが忘れることの有難さ思ひたり

田端 五百子 岩手

青空を汚してをりし窓を拭く鬱の心も清めらる心地す
山の端に夕陽ゆつくり落ちゆけり終はりたくない今日の日一日
立ち込める一面の靄この下が太平洋とは想像し得ず
庭師来てすすき穂刈られたちまちに風の姿を見失ひたり
寒つばき散る刻を知りてか「椿祭り」来賓の背にぼたり散り落つ
冷え和ぎてもう出番無き目出し帽温きペランダ竿に吊るしぬ
束の間の小春の日差し惜しみつつ竿しならせて夜具を干したり

飯塚 澄子 東京

両手上げ十回課せと注意書き身近にあれど気づかず過ぎぬ
歩行器で歩行練習日に五回最近気づく治療医の掲示
入浴のリハビリで飲む朝の茶の熱き味はひ最高の味
女八人男一人風呂仲間絵の趣味生かし女らに配る
入浴の送り迎への車より桜花の盛り池畔の眺め
文京区小石川の播磨坂桜花爛漫並木遙けし
椿散る庭土の美よ三種なる椿の下の散りざまの景

飯嶋 久子 茨城

菜花咲き娘が好きなゆず味噌とエプロンきりり厨房に立つ
わが団地創成五十年企業戦士も桜も老いて
公園に遊ぶ幼なの姿なくふらここゆする桜吹雪は
近いうち私九十をひとつ越え今日介護認定の日と
踊子草ホトケノザ姫女苑わが行く野道春花盛り
筋力をきたえんための散歩なり海浜電車見送りながら

山本 三男 群馬

そびえ立つ送電線の鉄塔の下にひしめく家々のあり
散歩路に白きタンポポ見付けたり在来種いまだ残るは嬉し
桜咲く季節となりて散歩路に今年もキジの啼く声を聞く

何匹もキジ居るらしきこの河原一羽の姿が遠くに見える
好物のまんじゅうなれど痛む歯を警戒しながら少しづつ食う
待ちていし葉桜の頃サボテンを戸外に出して植え替えをする
サボテンの胴切りしたるカッターの刃を丁寧に布で拭きたり

鈴木 やよい 東京

運転手を求むる広告車体に付けてバスはやうやく到着したり
一斉に盛り上がり咲く白木蓮はや根元には花びらの落つ
靖国の標本木の開花なりニュースのなかで人ら拍手す
駆け乗りたる新幹線に息を継ぐ遅れたくなし母の法事に
小雨あたるビニール傘の向かうには土手の桜が滲みて続く
失せ物を必死に捜して目が覚める辛き焦りに胸のつまりて
自転車規則厳しくなりたれば遠慮がちにて歩道を走る
頭上覆ふ八重の桜の迫力に身の沈みゆく心地のしたり

中村 哲也 宮城

日毎着る厚手のダウンジャケットに暑さ覚えて春を感じる
休日の空けて歩める道の辺にはか水仙姿を見せる
例年に増して値上げの通達のみあまりに多く叫びてみたし
ひと頃は分社の流れこの頃は再度会社の合併多し
定年に去りたる人に会社そば桜の写真をLINEで送る

満開の桜に明日は強風の子報があれば夕べに眺む

その強き電車止めたる春嵐に盛りの桜は花びら散らす

稲田 正康 東京

半端なる満開つづきこの年の桜ちらざり道しろからず
学校の整備をはるも生徒来ず使用予定は二学期なりと
中学校再建成りてめぐりみし桜もどらず無機的に立つ
中学の改装なりて鳥ら戻らずこの年の巣はずでに成りしか
来年の春には鳥ら戻るべしそれまでこちらが保つかもたぬか
介護ベテランの女性会社を退くとこの業界は離れぬといふ

江藤 ひさ子 大分

一枝ながら王者の如く咲くぼたん晴紅色に盛り上がる様

底紅晴紅色とて八重に咲く月桂冠とふぼたんの満開

「花王」とか「花神」などとか呼ばれぬき牡丹が咲きつ庭の一塊

花寄せて紫色系に咲き盛る牡丹に立ちぬけふの幾度

一塊に王者の如く咲く牡丹吹き来る風に大きく揺れつ

戸部田 とくえ 福岡

水替へをしつつ元気な目高たち「安心したよ」思はず呟けり
仏の座一輪挿しに親しみつつおくゆかしさの限りもあらず
幼子の思ひがけなく走りきて声かけくるる夕暮れの道

あらためて日々の暮らしに心こめ務めていかむ清くほのぼの
玉葱に肥料施しのちに雨しづかに聴きぬ窓うつ音を
露の臺あまりの数におどろきつつ互ひの春の喜びとせり
帰省して戻りゆく子に弁当を持たせて紛らすこの寂しさを

稲津孝子 福岡

息子の一家隣に住みて夕べには御飯ですよと呼びに来たりぬ
溜息は身軀によしと人の言ふ我の思はず知らずに出づる
眠られずいろはカルタを諳ずる指折り数へて絵札おもひて
学生の父の山にて使ひみし器台所^{あり}コツフェルと言ひて
アフガニスタン南部の産のラピスラズリ糸魚川の川に発見されきとぞ
梅の模様の羽織の裂地で母作りしお守もちて試験を受けき
庭に埋むる仲介物を掘りたれば何だ何だと慌つる蚯蚓
庭の角まがれば香りすると言ふ今年は臘梅ながく咲きゐて
己ゐなくなりても十年は大丈夫と夫言ひゐき六年になる

姉川素枝子 福岡

霞みゐる山より更に遠き山佐賀の天山わかきころの山
遠霞む山の裾野の天川あまがはの小学校につとめてをりき
日に二往復の乗り合ひバスに幼負ひひたに走りき物を買ふため
複式の授業に幼女加はりて絵などかきゐき学童まねて

長く生きるを業と言ひみし母の歳こえて声あげよたよた歩む
楽しき歌よめと電話に女孫いふ過ぎにしことはたのしきものを
埼玉に買ひにし菓子ごをば覚えゐて孫より届くおこし御家宝ごかほう
食べこぼし気付かずをれば息子きて何か言ひつつ拾ひてをりぬ
紅葉する秋なく雪降る冬もなく雛の祭りと桜のつぼむ

井上菅子 山形

この世より消えたる軍歌聞きながら傷兵思ひ飢ゑ思ひみる
「麦と兵隊」麦畑にて歌ひたく麦蒔きたると若き歌ひ手
昨日稗を刈るといふ手にギター弾き歌ふ軍歌に時遡る
「海行かば」歌ふ若者戦争を知らぬが征きたる兵のごと見ゆ
学生の若き君ゆゑ軍歌といふ選択の理由われは知りたし
戦傷の友を背負ひて行軍のところ君は眼をつむる
馬も己れも傷つき飲まず食はずにて異国に果てしを誰償はむ
岩大の日本兵とささやかれ軍歌配信の君いまいづく
兵士らを鼓舞せし軍歌も今聞けば悲しみのみを残して響く

井上榎子 新潟

大雪に打撃被る街中の屋根の雪庇は軒並うなだる
雪解けの夜更けの道を走りたる車はなべてシャーベット状の音
花粉症の薬の眠気に接客の返答即座に言葉浮かばず

車海老産地直送の生きのよさ指先痛めて衰ふを待つ
 飼はれぬと男は鯉こいらを運び来て返事待たずにわが池に放つ
 水仙の花の耀きらひ浴ぶごとく人らは道辺に寄り来てかがむ
 木立より吹かるる桜の花びらは無尽数にて歩道を被ふ
 遅咲きの梅も混じりて桜花総てを濡らし春荒れ続く
 峽に来て心痛みつ雪折れの桜の小枝に花のちらほら

歌集 / 歌書
御礼

編集室・佐藤靖子

■白沢英生歌集

『紺碧のインク』

令和七年十月十五日発行、二〇二首を収録している。NHK全国短歌大会や、各新聞歌壇で、秀作等選を受けた作品が始まる、テンポ良い一冊である。この本のデザインは白澤真生氏で「表紙のデザインについて」という文により父子であることが分かった。父親が毎日早朝に書いていたものが短歌であったことが分かったこと、早朝に出かける父の瞳に映った朝日、父の紺碧のフィルターを通した

朝日は青い太陽云々の文章に切ないような愛情を感じたので、そこも読んでほしい。
 著者は二〇一四年に「彩雲」入会。坂田道信の複写ハガキの会の友と短歌を始めた由。まずは受賞作品から。

新聞の配達終えて帰る朝あの電柱は傾いている（NHK）
 幸せの香りと思う味噌汁の匂い感じて朝刊配る（朝日）
 戦闘機パイロットにも女性をと「女性の活躍」そういうことか（朝日）
 ことごとく魚を煮つつ濁りゆく淋しき目にも煮汁をかける（朝日）
 燕は植田の上を低く飛び東海地方けふ梅

雨に入る（中日）
 配達し拡張してきたこの地域隣の店の区域となりぬ（毎日）
 エンドウの豆だけ食べて殻捨てる菜園に夜何か来ている（読売） 以上抜粋。
 知恵袋、誠実、ユーモア。
 駐車灯点ければ螢集まるとやってみせれば友ら驚く
 裁縫は不得意だけど破れたる堪忍袋は自らが縫う
 ゴミ一つ拾えば一つきれいになる翌日廻れば二つに増える
 手術との通信出せば友返す「君も病葉わづはわれも病葉」 （ドロップ刊）

■飛鳥游美歌集

『野芹』

令和七年十一月十五日発行の第五歌集。六一一首と、「運河」に発表した随想と歌を掲載している。「運河」副代表也。
 歌からは著者が司法関係の仕事だったことが分かる。

かつてわが法服つけて模擬廷の高壇に各
 各の位置を見下ろす
 調停の間に通れる法廷の廊にあまたの人
 らうつむく

能登地震では、著者の住む能美市も大変だったと思う。

震災後二日経し夜の寒星の光をあびてい
 のちを思ふ
 あめつちの異変に街に出でまよふ牡の鹿
 二頭梅の花嗅ぐ
 あらげなきなみに遭ひしは人のみにあら
 ず赤き尾の狐ふりむく
 歌から想像する色彩や情景の美。
 緋織の鎧に夜討ちを決するごと俱利伽羅
 峠に電光陰し
 岩清水わくひとところ山の目を弾きうつ
 ぎの花ぬれやまず

ゆくりなくふれあふ響音ひえびえときこ
 えて牛乳配りゆくらし

雷鳥のついでむ雪にいつめぎむ日月わた
 る黒ゆりの原
 朱の橋のいろは真闇に吞まれゆきほたる
 の点滅橋くぐりゆく
 霊峰白山の恵み。
 蔵元の萬歳樂とはゆゆしけれ寒の朝に初
 しほり届く
 （新運河叢書第二十二篇 紅書房刊）

■伊勢方信歌集

『スノームーン』

令和七年十二月三日発行、四八四首の第十歌集。コロナやロシアの侵攻が世を悩ませているなか、周囲のことを詠みつつ、政などへの怒りをうたう。スノームーンは二月の満月のこと、飢餓月という別名は寒さの厳しさを、また通称の二月の満月は、これから寒さを抜けて春が来るという希望を思わせ、この本の屈託と希望を感じた。「朱竹」顧問、旭日双光章受賞他、賞数数あり。また著者の背を押した人の名に私の先輩の父親、浅利良道氏の名があることが何とも嬉しかった。
 この一巻に夭逝した妹さんへの思いが底流

している。

葉完りに手渡しされし紙風船ふくらまず
 なく行きたり汝なれは
 飯糰いけすることなく逝きたるいもうとの手
 向と植ゑたるおしろい花赤し
 コロナといえばマスク。
 言問へど逝きたる友の病名と悲しみまでもマスクは隠す
 自浄作用の劣化がすすむまつりごとの世
 にありてコロナに負け続けをり
 あやうくなつていくような世。
 小歌誌の締切日かくも破らるるに郵政民
 営化の成れの果て見ゆ
 九条を守りて戦にとほき国のつひえゆく
 兆しか反撃能力強化は
 寺山修司よくぞ言ひたり 身を捨つるま
 ではにはすらぬ国にわが生く
 敗戦の科背負はされ緘黙を守り末枯れて
 逝きたり父は
 景色など。
 目鼻だち定かにあらぬ野仏はわがふるさ
 とのながき友達
 街川の河口に群れて上潮を待つ鱈いなの背が
 夕光砕く
 読書なす若者のなき電車にて競輪新聞読

む老いのあり

老齡化問題にふれる歌などもある。最後に
おいしそうな歌を。

馬蹄螺にまの蓋を楊枝に除きみつひたむき
にある己のをかし

(朱竹叢書第五十三篇 ながらみ書房刊)

真野少歌集『山葵の花』を読む

桜井美保子

二〇一一年から二〇二五年までの作品を取
めた著者の第二歌集。

砂かぶり乾ぶる魚の匂いせり家の主の指
示を聞く庭

コップには用無からむに割れざるは洗い
て干せり五十個余り

大波の引きたる浜にべしゃんこに圧しの
ばされてやかんが一つ

東日本大震災の被災地での支援活動の様子
が伝わってくる。瓦礫の撤去や家屋の片付け
など被災した方々の日常を取り戻すための作
業である。一人一人の力が復興への道を拓い
た。浜には津波で変形したやかんが打ち寄せ

られている。いかに甚大な災害だったか。読
者の目もそのやかに吸い寄せられる。

かきまぜて匙置く皿の汚るるに珈琲ふた
口吸れば慣れつ

皿の僅かな汚れに気づいているのにそれに
慣れてなんとも思わなくなるという微妙な人
間心理。

空き缶が凹んで四つ転がれる路上に堆積
する時間あり

空き缶が捨てられて作者がそれを見るまで
に路上に積み重なった時間。見えないものが
可視化されたような表現だ。

地下鉄に座るもろびとマスクせりなにゆ
えひとはおのれを愛す

一升びん間に立てて語らえりマスクを脱
ぎて愛かわすごと

歌集に対応する期間にはコロナ禍の日々が
あった。今では懐かしいくらいだが当時はマ
スクが必要不可欠。一首目に頷き、二首目に
ほのぼのとする。どちらも下旬への展開が面
白い。

朝の那覇その風景に踏み入りてワイシャ
ツの裾出して歩めり

警戒船と呼ばれて浮ける日当の五万円な
ればはや漁をせず

あるだろうと恐れつつ来し売店に「ひめ
ゆりちんすこう」は並びぬ

塚に向く老婆の闇に見ひらける眼に惨は
見ゆ折るにあらず

沖縄の辺野古、摩文仁での作。沖縄の現代
を見つめた歌が並ぶ。そして作者は太平洋戦
争末期の激戦地にも足を運ぶ。

B 29に同梱されて二センチのファットマ
ンあり箱には書かず

かなしむという感情を起動するボタンを
原爆ドームにさがす

「ファットマン」は長崎に落とされた原子
爆弾。プラモデルの戦闘機にこんなものまで
添えられているのに驚くが、この歌からの衝
撃で戦争の歴史を忘れてはならないと改めて
思った。広島原爆ドームへ行つたことはな
いが、言葉にならない感情に包まれるのかも
しれない。

ソーサーに置くスプーンのたまゆらを反
すひかりのごとくうたあり

ゆびさきに歌稿をたどる紙の上こだ椿
のくれないが落つ

思わず立ち止まる作品がたくさんあった。
読み手の心にいい刺激を与えてくれる歌集で
ある。(不識書院刊)

四月号 冬雷集評

桜井
美保子

君の近影フォトショップに微調整しつ
つおのづからむきあふその眼光に

大山敏夫

冬雷の編集組版に月々取り組む作者。
新設の「応接室」の欄に新作五首をお寄
せくださった萩原千也氏の写真に向かい
画像の編集中心なのである。萩原氏の眼光
に感じ入るさまが力強く歌われている。
節分を過ぎて朝の陽高くなり庭面に待
ちたる直射光届く 青木初子

まだ寒い時期であつても節分を過ぎれ
ば春へと季節は移っていく。庭には燦々
と光が差してきた。「直射光」という言
葉に待ち望んでいた気持が籠っている。

通販にて冷凍トラフグ取り寄せめアラ
のみなれどおじやは旨し 中村晴美
スーパードでは見かけない食材も通
販なら得ることが出来る。トラフグのあ
らをおじやにするという工夫が感じられ
充実した日常が見えるようである。

思考停止は脳のフリーズ状態かぬくき
紅茶とチョコにて解除 橘 美千代
一連の中に電子カルテの歌がある。使
いこなすのに苦心しておられる様子。頭
も疲れ身も疲れる。フリーズ状態は少し
の休憩で無事に回復したようである。

筍、きんとん、煮豆等ならば折箱の病
院の元旦食にことほぎのあり

野村灑子

年の初めを病院で過ごされた作者。正
月料理の入った折箱が配膳されたよう
読者も何かほっとする思いである。ど
こにいても新年を祝う心は変わらない。結
句に明るい光を感じる。

ソファアにて寝入る夫に延々と売込み
続けるテレビショッピング

鈴木やよい

テレビを見ているうちに眠ってしまった
たご主人。それなのにテレビでは次々と
商品の売り込みが続いている。ユーモラ
スな場面を温かく切り取っている。
自動車に乗り込みドアを締めたれば外
吹く風はここに届かず 山本三男☆

風が身を切るように冷たい日。車の運
転席に戻りドアを閉めた時、漸く寒風か
ら逃れることが出来た。歌からは一瞬の
安らぎが感じられる。

庭に咲く花切りてきて水仙の匂ひいつ
ぱいの母の命日 稲津孝子

母上は庭の水仙の供花を喜んでおられ
ることだろう。下旬の「匂ひいつぱい」
という柔らかな言葉がしみじみとしてい
て懐かしく響く。

黄葉せず枯れて散りたる櫛の葉車に舞
ひて路肩に積もる 姉川素枝子

最近、黄葉を待たずに枯れて散る葉を
よく見かける。地球温暖化で植物の環境
が刻々と変わる世。身近な櫛の枯葉を見
つめたこの歌を大事に読みたい。

斬合ひの小説次々おもしろく読みたる
後を凝る首と肩 井上蒼子

時代小説を楽しまれている様子。「斬
り合ひ」の場面が多いのかもしれない。
その動きが間近に見えるような筆致なの
だろう。思わず自身の体にも緊張が走り
固くなる。下旬の表現に実感がある。

作家と編集者の微妙な関係

高橋 輝次



今回は、作家と編集者の文章にまつわるデリケートな関係について書いてみよう。といっても、私は地味な人文書分野の元編集者で、著者も大学の偉い先生が殆んどだったので深いつきあひもなく、文芸畑の編集者のような作家の面白いエピソードなどは全くネタがない。

それでは、他の元有名な編集長の回想記や古い時代の編集者の追悼などを古本で見つけては、本で紹介したりしている。今回は、最近たまたま読んだ小説家の二冊の本に登場する編集

者とのやりとりから、注目した点を簡単に紹介しよう。まず、ブックオフで手に入れた佐藤正午のエッセイ『小説家の四季』（岩波現代文庫）を拾い読みしていて、気になる箇所があった。佐藤氏は『永遠の1/2』でデビューし、『月の満ち欠け』で直木賞を受賞するなど、評価の高い作家だ。

本書は氏の作家生活の日常を年度ごと冬から秋に四つに分け、各々テーマを掲げて（例えば手紙、ワープロ、パソコンなどと）その心情を本音で詳細に綴ったものである。二〇一三年の春の項で、東京の担当編集者がわざわざ佐世保在住の氏のもとにやって来て打合せしたことから話が始まる。そこで、ふり返って編集者には多々感謝しつつも、編集者に自分の文章の手直しを求められたことは駆け出しの頃もある、例えばこの二つの段落はいらない、と言われてごっそり削ったこともあるが、そのおかげで小説がぐんと

よくなったという記憶はない、と断言している。また、小説中に「生きた化石」という言葉を使った際に、年長の男性編集者から「生きている化石」などと書くべきと言われ訂正したが、未だに深く後悔している、とも。そのなるほどと思う理由はここでは省くが、こちらの方が正しいのでは、と疑問を呈する校正者や編集者が実際にいるようだ。

そういえば、つい最近四、五日間没入して面白く読み終えた村山由佳の長編小説『PRIZE』（文芸春秋）にも、よく似たシーンが出てくる。村山氏も『星々の舟』で直木賞を受賞し『ダブル・ファンタジー』では三つもの文学賞を取って活躍中の人気作家である。本書は作家、編集者双方の視点から臨場感豊かに二人の関係が描かれている。主人公の女性作家は新刊小説を出す度に初版3万部も刷られ、すぐ増刷

がかかる程の売れっ子で、本屋大賞にも選ばれる位のだが、年来、唯一取れていない、権威ある直木賞がどうしてもほしいと切望している。彼女を担当している、学生時代から熱烈なファンでもある女性編集者があるきっかけから、深く信頼する仲となり、公私にわたってつきあいを深めてゆく。二人で直木賞をめざして他出版社で出す予定だった新作小説もわざわざ彼女の社に変え、軽井沢の自宅に呼んでゲラの全文を三日かけて逐一、推敲してゆく。編集者は、第一章の最後の二行を削る方が、かえって読者の想像力に訴えて効果を高めると考えて提案し、作家もしばらくの沈黙の後、それを受け入れて削ることにしたのだ。ところが、である。その作品が刊行され、直木賞にノミネートされ、選考会を経て、ようやく受賞が発表される一日前、作家が二行削った箇所の一行が残ったままなのに気づき、授賞式のスピーチで受賞

を断る、という劇的な展開となるのだ。実は編集者が印刷直前、一行は残した方が良くと考え直し、作家に無断で一行元に戻したのである。作家は激怒して二人の関係は決裂したままで終わる。これほどまでに作家の、文章に対するこだわりやプライドは強いのである。本書はフィクションながら、『文藝春秋』社や『オール讀物』は実名だし、直木賞選考委員の一人、大御所の南方権三氏は明らかに北方謙三氏がモデルであろう。村山氏自身を主人公作家に投影して、現在の出版界への不満や要望を吐露している部分があるように思われる。

こう見てくると、後に作家となるような文章の達人でない限りは、編集者が作家の文章に口出しすることはどうも控えた方がよさそうに思う。私などは売れない本ばかり出している書き手で、同列に書くのもおこがましいが、実は私にも昔、企画出版で古

本エッセイ集を出してもらった過程で、一寸似た経験をしたことがある。その独り出版社社主で編集者でもある方は、文章道に一家言ある人で、初校ゲラを前に広げて三回程喫茶店で長時間、文章を点検した。ここは意味が分りにくいから訂正したら、とか、ここに読点を打った方がよい、など逐一、細かく厳しい文章指導を受け、大概それに従って訂正した。ただ、そのままでもいいのでは、と思う箇所も正直いろいろあって、抵抗を覚えたのも事実である。しかし、いちいち反発して、口争いになり、もしも出版できなくなれば元も子もなくなると思い、ほぼ大人しく彼の言に従った。おかげで、読みやすい文章になり、詳しい索引も作ってくれたので、良い本になったと今でも感謝している。ただ、以来、自分の文章術については、未だに自信がもてないというトラウマが残ってしまった。

四月号 作品一評

小林 芳枝

新年の畑に来れば野菜たち少し凍りて輝いている 正田フミエ☆

大切に育てている野菜たちまで新年を祝っているようで微笑ましくなる。冬晴れの朝の畑の状態が的確に表現された下句の写実が効いている。

ブレーキを踏む勢いにアクセルを踏んでしまいぬバックしながら 齊藤トミ子☆

ニュースで時折り聞くことのある事故ではあるがご自身の体験としての歌に衝撃を受けた。幸いに怪我はなく車の破損で済んだことと、冷静に処理のできた事にほっとする。お大事に。

紅梅と白梅ひと寄りそひて氏神の庭に春はきませり 倉浪ゆみ

早春に咲き始めた梅に春を感じて温かい。氏神様へのお参りを日常的にされているのであろう。悲しい事も嬉しい事も心に受けとめて穏やかに過ごしたいとい

う願いも感じられる。

暖かい日差しはあれど肌寒く凍える指で新聞をとる 松中賀代☆

晴れて気温は上がっているというのに部屋の中は何だか寒いな、と感じることがある。季節の変わり目の微かな違和感が丁寧に詠まれている。

咲き初める梅に重たき春の雪樹のエネルギーに滴り落ちる 永光徳子☆

立春以降に降る雪は粒が大きく水分を多く含んでいる。重そうな雪が解けてゆく様子に樹のエネルギーを感じてその力強さを詠まれた。そういえば桜なども花を咲かせる頃の樹は枝先まで力が満ち溢れているようにみえて逞しい。

霧出でてゐるらし狭き海峡に船の警笛やまざる夜明け 大塚照美

早朝に繰り返される警笛を聞きながら海の様子を思い浮かべているのだろう。港を出てゆく船も漁を終えて帰ってくる船も無事であるようにという願いが詠まれている。

電柱の上に一羽の鴉きて四方に呼べど

答へはあらず 須藤紀子

電柱で鳴いている鴉は何度か見かけたことがある。あれは仲間を呼んでいたのだろうか。私の見た鴉の周囲にも仲間らしき姿はなくて、すぐに飛んで行ってしまったのだが。

町内の安全パトロールに誘はれて緑のチョッキ着けてもらひぬ 齋鹿ミヤコ 何人かで町内を見回るのであろう。有難いことである。制服の緑のチョッキを身につけて意識が高まる。

出張のついでと孫が訪ねくるじいじに会えてただ嬉しいと 高橋耀子☆

退院した祖父を訪ねてきた孫の一言が心に残る。さらりと詠まれているが結句「じいじに会えてただ嬉しい」という言葉には深い繋がりが感じられる。大好きで大切なお爺ちゃんなのだろう。

すいすいと駅の階段駆け上がる今日は川越歌会の日なり 野崎礼子☆

歌会は学びの場でもあるが仲間に見える楽しみは大きい。活字では得られない作者の思いに触れることもできる。

四月号 作品一評

藤田 夏見

定植のエンドウ飛ばされ萎えており西風強く一日吹きて 正田フミエ☆

やっと定植したエンドウが強い風に根本から飛ばされて萎えている。この西からの強風は特に強いものだったのか。全てのエンドウではなく初夏の頃に収穫出来るものがあると良いのと思う。

手術しても手術しなくてもそれぞれに高齢者ゆゑのリスクの高し 村上美江

高齢者の生活をどう維持するか手術によって失われるもの、回復するもの悩ましい選択に心が揺れる作者。

葬儀社のコマーシャルソングの心地よき調べにのつていつしよに唄ふ 佐藤靖子

コマーシャルソングは葬儀社のもの。そのリズムは心地良くついつい一緒に歌ってしまふ。死ぬる事も葬式をあげる事もあけつぷろげな商戦となるのです。町内の安全パトロールに誘はれて緑の

チョッキ着けてもらひぬ 齋鹿ミヤコ

子供達を見守る活動に参加をする作者は緑のチョッキをつけて貰った。少し面映い心模様を感じる歌です。町内を緑のチョッキでパトロールする方達を見かけると筆者などはホツとします。

寒風をものともせず若者はひとり熱唱す駅前広場 石渡静夫

ストリートミュージシャンの歌声が駅前広場に響いている。寒風をものともせずひとり熱唱する若者に作者の感慨か。

「いとよりのすり身で充分」顔馴染みの店員近付き耳元に囁く 川上美智子☆

鮮魚売り場で品定めする作者。近年の物価高は海産物、生鮮野菜など全てに及んで何もかもが高級食材になってしまった。顔見知りの店員の耳打ちに頷いてしまふ。

われ逝かば汝はこの雪如何にせむ米寿の夫の深き溜息 小林貞子

北国の冬の暮らしは積雪との闘いと聞く。高齢になっても雪掻きの欠かせない

暮らしの中で妻を思いやる夫のため息混じりの言葉は重い。

日の光あまねく満ちて今日の晴れ思はず帽子買ひてしまへり 本間志津子上の句の歌の流れに何か壮大な景色をあらわされるのだろうと、私は読み進みました、なんて嬉しい展開。素敵な帽子をゲットした歌。

右に揺れ左に揺れてニコちゃんマークリュックの上より笑顔振りまく 高橋耀子☆

前に行く子のリュックにつけられたニコちゃんマーク。孫だろうか、歩むたびに右に左に揺れ大きな笑顔を振りまいている。見つめている作者の笑顔は溢れっぱなし。

床下に寝かせし味噌の二年経ち蓋を開くやキュンと香り立つ 野崎礼子☆

手前味噌の置き場所はそれぞれです。作者の場合は床下なのですね。ゆつたりとまどろみながら熟成する事二年。蓋を開けた時の香りをキュンと表された。作者の心の音が反響したのだろうか。

作品一

三月四月

大山敏 夫 埼玉

早咲きのさくらは青き夕空ををどり泳ぐとわが眼には見ゆ
早咲きのさくらは淡くうひうひと小花そよがす眼のすぐうへに
早咲きのさくらははまだ幹ほそく全身そよごとくに咲くか
幹若きこのさくらには花のとき来てひらくにもはぢらひの見ゆ
桜はも初々しさも婀娜つぼさもあるかと思ふ老骨われに
早咲きのさくらと八十歳近づける男とならぶ紺の空のした
夕空の紺はかぐるき夜に入りて沈み鎮まる三月もすゑ
四月一日けふ満開といふ感じ花にそよ風散ることもなく
水溜りのうへに漣ひかるまで雨後の風あり四月のひざし

正 田 フミエ☆ 栃木

じゃがいもの植付け終えて三週間うねに緑の小さな芽の出る
初めての北海道がね植付けてひと月経てど出芽まだ見ず
ひとり来て桜の下に佇めば一声高く野鳥鳴くなり
輝きてしだれ桜の咲く土手に歩み来たれば息のはずみぬ

実生から育てし花桃八年目に十の花桃咲かせくれたり
楽しみて畝の草取り進み来れば紫蘇の一群自然生えあり
この春は畑から紫蘇の自然生えありて種まきせずに移植す
三月に育苗のカブ小松菜は日中窓辺に夜はコタツ隅に

斉 藤 トミ子☆ 栃木

麦畑の少なくなった散歩道ひばりの声の未だ聞かざる
翡翠が水中目掛けて飛び込みぬ小魚飲み込み又も飛び込む
仏の座レンゲの花と間違うなり群れ咲く様を描く人あり
片栗が満開となる三毳山観光バスも数台来たり
冬枯れの木立の元に群れ咲ける片栗の花人を呼びおり
綺麗ですねと言えばきれいと返りくる片栗見る人皆んなが笑顔
うつ伏せになりて右手と左足床から上げる腰痛体操
腰痛に効くとし聞けば続け来ぬ気付けば腰痛和らぎており

浜 田 はるみ☆ 埼玉

ミラノの緯度を確かめ現地を想像しつつオリンピック観る
冬季五輪フィギュアスケートの得点を予想しながら見るのは楽し
初めて観た時から「りくりゆう」ペアの演技に釘付けとなる
羽生結弦なき後に続くフィギュアは個人もペアも安定感あり
変化無き生活のなか日脚伸び夕方五時でも明るくなりぬ

梅見物腰が上がりずそんな時梅写真メール届きて嬉し
ロシアは手段選ばず兵集め過酷な命に服従させる

倉 浪 ゆ み 埼玉

いとたのし得る事多き会なるぞゲスト迎へて川越歌会
顔知らぬ母の好みし紫木蓮実家の庭につぼみ耀ふ

白木蓮胸にかざりて出席するか遠き日子の卒業式は

「ああいやだ川越の町の変はり様」淋しげに言ふ九十九里の妹

何とまあ町行く人は数多多数多我もなりたし観光客に

菜の花と犬のふぐりが咲き初めて堤の道は我を誘ふ

友からのプレゼントなる桜草双葉広がり春を告げゐる

林 美智子☆ 東京

陶芸の師の住む多摩の連光寺竹やぶありて竹の子の季なり

年一度大釜出して薪くべて米ぬか入れて竹の子を炊く

畑にはさやえんどうが実をつけて竹の子ご飯の彩りとなる

フランスより一家四人が訪れぬ八年振りの三度目の再会

フランス人一家と鰻を食べに行き大喜びは我が家族なり

鰻屋にて折り鶴折れば子ども二人我が指先見て上手に作る

伊勢志摩と熊野、京都を巡る間に女兒はネットにて折り紙学べりと

フランスの女兒の我へのおみやげは折り紙のカエルと小箱嬉しき

松 中 賀 代☆ 高知

先駆けて静かに開く山桜うす紅の葉に寄り添う小花

花にやる水を片手に杖を持つ少し力が出来たかと思う

球根に芽が立ち始む緑の芽おどろきの目で桔梗に水やる

約束の時間通りに迎え来る満三歳の誕生日会へ向う

ケアハウス〇〇ホームの宣伝が朝に晩に嫌に目に付く

本 郷 歌 子☆ 栃木

近江神宮に百人一首の額並ぶ競技かるたの聖地となりて

源氏物語の始まりなるや石山寺に紫式部の部屋が残れり

石山寺より瀬田川を臨みたり式部も見しや瀬田の唐橋

瀬田川のせせらぎ優し窓に寄れば夕日に染まる近江富士あり

右手には都の御所左手に琵琶湖が光る比叡山に立つ

一筋の煌めく道の現われる朝日昇り来る淡海の湖に

雛の声にピーヒョロと答えつつ鳶は輪を描く琵琶湖の上に

水澄みて芥ひとつ無き淡海の湖滋賀の人々の誇りなるべし

村 上 美 江 岩手

咲いてくれ咲かせてくれて「ありがたう」碁石の椿は古木日本一

高き声に此方も元気を頂きて八十路の神官の後から続く

困り切り頭の中が白くなり高齢者ゆゑの迷ひのありて

満たせない吾の頭の中にある「出来ない事」の増え来たること
とにかくに春の来るのに物憂いな角にやりたし確としないもの
やれ花粉やれインフルとコロナウイルス戦争まで起き値上げのパンチ
住みづらい「平和の日本」これ程に値上げに苦しむ年のありしか

伊 澤 直 子 ☆ 東京

堺港海鮮料理の食事処松葉がにを堪能したり

堺港の海鮮市場は松葉がにずわいがにのたくさん並ぶ

かに並ぶ店を眺めて回りたれば値引きするよと呼び止められる

店員の勧めに松葉がに三枚を鳥取みやげに買うことにする

旅終り届きたるかに前にして娘と二人黙もくとつつく

下落合神田川の桜並木小滝橋までゆっくり歩く

一面の桜の下にムラサキハナナ二色の霞たなびくような(昭和記念公園)

チューリップ八重で大きく開きたる牡丹のごとく華やかなりて

乾 義 江 ☆ 茨城

寒さから解放されると思うだけで嬉しや梅の綻びを見る

故郷の甥の嫁御の訃報届く急死と聞きて胸が塞がる

年末の嫁御の言葉スマホの中に仲人の我より先に逝くとは

春めくを師と分かち合い翌日に季節外れの雪舞い落ちる

手術待つ眼瞼下垂の形成外科半月待たされ気持ち萎えくる

可愛くもラッパ水仙の咲き初めるごめんねと書いて仏壇に供花す

教えられし我が手に葉刈りの土佐水木見事に咲きて一安心す

気象台の桜の開花を探す人二輪ではだめと靖国神社

催花雨

松 本 英 夫 東京

褐色の隕石に孔あまたありいづくより来し星二・五トン(生命の星・地球博物館)

カルデラの山をめぐれる急カーブエンジン唸り箱根のホテルへ

朝よりねぎとる並ぶ嬉しさよ外国人多きホテルのビュッフェ

ほほゑみて「かしこまりました」皿を置きスマホ構へる青き目の給仕

目的地知らされぬまま乗る車景色を見つつスマホの地図追ふ

催花雨に木木の芽ほころび桜花箱根の山につぼみ割れゆく

しだれたるピンクの馬酔木ふり続く小糠の雨につやつやとせり

欲しきもの「ネックレスだよ」に乱されぬ次代を担う男子かくあり(ガラスの森美術館)

大 塚 照 美 兵庫

歌の友と行きにし愛知万博も薄墨ザクラも忘れ得ぬ旅

寝過ごして春眠などと戯けたる吾にひと言あるや亡夫は

庭に咲く乙女椿の一輪を下さる義弟の変はらぬ人柄

門灯のあかりを消せる暗がりに仰げばかがやく下弦の月は

折り鶴をわれにと娘が卓に置く膝の手術が決まると言ひて

換気扇のスイッチ届かず今に知るおのが身の丈ちぢむ六糶

角曲ればわが家の見ゆる真正面出迎へて呉るおほき満月
春彼岸の仏花にまじる猫柳の銀色の毛に春を知るなり

永 光 徳 子 ☆ 東京

月初めの桜祭りの華やぎは跡形もなく薫風そよぐ
夕暮れのチャイムの音にムクドリは弧を描きつつ罫に向かう
久々に娘と乗りたるローカル線駅間長く停車も長い
車窓には若葉萌え立つ雑木林昔のままの景色嬉しき
山あいを抜けて広がる河原には鯉のぼり立ち絵本の如し

三 好 規 子 福岡

トロントの留学終へて間なく孫は施設に来てくるメープルシュガー持ちて
スマホにて語学習へばと「デュオリンゴ」といふアプリを入れる孫は
朝食前にデュオリンゴにて英会話を学ぶ中学生レベルならむ
太宰府の天満宮の飛梅の枝振り変はる六年前の写真と
天満宮の飛梅の札が父書きし旧姓飛松の字に似て嬉し
白寿なる隣と食事を待ちながらトランプ非難すごまめの歯軋り
公園の桜がちらほら咲き始む腰痛おして来る弥生の五日
男の孫は卒業記念に茅ヶ崎より友と箱根へ自転車旅行

須 藤 紀 子 埼玉

菜の花の右に左に咲く道を町バスが来るそれも黄の色

梅干しの作れぬ年のありしこと年々の瓶を並べて思ふ
焼き魚をきれいに食ぶる吾が娘手本にならぬ親の子なるに
強風に花粉ほこりの渦巻きて思ふ戦禍の街の大気を
家々を掠め飛びゆく戦闘機基地ある街の日常の異常
数万の子らを殺せる武器なるを性能良きと買ふのか政権
人類の終はり思ひて目覚む朝薔薇の芽吹きの色やはらかし

佐 藤 靖 子 東京

どこかから風がつかくる雨粒と白き花びらありがたき道
友愛数のことなど語るカッブルを心洗はれ眺めてをりぬ
楽天と悲観の深淺均すのは時代小説藤井聡太君
サッカーとラグビーどちらが好きですかアイスホッケーと答へました
割算の除数被除数といへる名を知りてみたるや忘れたるのや
平民の料理よろこぶ侍のところまできて既読に気付く
沈黙の間を演じある俳優に「早く」とじれてしまふこのごろ
火葬のとき骨を残らず焼いて欲し要るいらざるを選べればよし

齋 鹿 ミヤコ 神奈川

この春は倍に殖えたる牡丹のつぼみ柿の若葉のもとにふくらむ
濃く淡く紅染むる花びらの重なる様はダンスのドレス
あまた咲きその数かぞへし深紅の牡丹ことしはつぼみのひとつとあらず

道に沿ふ石段登れば舟久保の町内会館を兼ねる神社
祀るのはおとたちばなひめと記さるる立て看板の船玉神社
何故かおとたちばなひめの祀らるることに心の惹かれてゆけり
身を投げて荒ぶる海を鎮めけるおとたちばなひめの伝説

鈴木計子 東京

よちよちの幼がわれ向き笑ひたるはづみに転ぶ泣きたりはせず
転びたる幼が這ひ這ひにて立ちて見守る母に抱かれてゆきぬ
振袖のなじみて似合ひ着物つていいなと見る裾に靴が見えをり
名に惹かれ立ちたる売場「赤ちやんのお尻」パンの丸くて白し
緊急にあらざる選挙を厳寒に為さむ権力追ひたき節分
雪となる選挙の帰り雪だるま滑り台つくる子らに安らぐ
久久の雨に乾きてゐたる川流れ戻りて水面の光る

石渡静夫 茨城

市役所の庁舎は一瞬跳ね上がる四月一日警報の渦
里山に望遠カメラ据ゑ付けてサンバ待ち居る愛鳥家達（高峯山麓）
坂道を登り続ける一時間鷲の声絶えることなし
糸桜は枝垂れ桜のことですと櫻守言ふ微笑みながら（櫻川磯部稲村神社）
糸桜の花の開きはこの程度枝を見せては櫻守の言ふ
櫻守は実生の桜を掘り起こし育ててみると誇らしげに言ふ

参拝所に流れ来たるは謡曲の桜川なり重厚なるや
雨風に打たれて赤いチューリップ千切れんばかりに首を振るなり
殺戮を平気で行ふ人達よ自分は死なぬと思つてゐるのか

西村邦子 兵庫

嫁ぐ娘と二人で旅した遙かな日象の背中に笑顔の写真
娘との旅がいよいよ近づけば冷凍庫に蓄へる夫の食料
娘との旅が始まり一日目ベッドに沈みて朝を迎へる
スマートフォン片手に娘は検索す夫と二人の旅とは違ひて
お互ひに言葉が通じなくつてもパパゴのアプリで会話が出来る
観光地巡りて二万歩寝る前に湿布を貼りぬ娘に言はずに
誘はれて思ひもかけぬ二人旅娘に感謝夫に感謝

植松千恵子☆ 静岡

暖かく寒くはなるまいと意に反し寒の戻りに厚きズボン履く
久しぶり畑の様子を見に行けば豆の新芽は鳥に食われけり
震災後もう十五年子は育ち消えた町への想いを口にす
爆撃ですぐ終わらせると豪語してさすれば一層反撃は増す
ニューヨークより帰れないとラインあり雪で飛行機飛ばず足止めと
二月だが日本は暖かホテル変わりワイファイ通じず帰国を祈る
引き潮で岩の島まで歩けると時間が合えば見たし伊豆の海

帰国後に体調崩し二週間バナナと粥で何とか凌ぐ
食欲と日常戻りて気がつけば暦は十月体調優れず
十月末の茶会に向けて着付する気力ほぼ無く時は過ぎたり
金曜日腹に鈍痛トイレ行き再びの血尿かなり焦る
病院で膀胱炎と診断され明後日の茶会への出席を心配
幸いに薬がよく効きトイレ行く回数減り土曜日の朝
小雨降る朝に出発先生宅で友人の手を借り着付け完了

川上 美智子☆高知

せせらぎの音は楽しく響きたり聴きつつ歩く小川のほとり
土手に咲く菜の花映し黄に染まる川面照らして春の陽眩し
里山にいち早く咲く山桜そろそろ見頃友と出かける

山桜の幹這う蔦の葉繁るさま帰たる後も頭離れず

放棄され山菜育たぬ藪の中立て札残る「山菜の採取お断りします」

川俣 美治子☆栃木

桜咲く暖かな陽に誘われて軒先に蟻一匹歩めり
空仰ぎ庭の花にも目をやれば出かけてみたき陽のやさしさよ
公園の桜のはなびら風に乗る庭の面へと舞い降りにけり
階段に飾れる旅の絵の前で足を止めつつあああの時は

ウド並びセリにタケノコさりげなく春満ち満ちて心弾めり

桜草あふるるほどに咲き満ちて道にこぼるる主なき家

一万歩春には歩くと決めたれどなお動かざるわが身なりけり

大野 茜 神奈川

柚子の実の残り採り終へ背伸びする見上げた空に縹雲崩れ
氷雨降る道帰りたる妻の持つシクラメンの鉢に花の溢れる
分担の朝の仕事を片づけて一休みと言ひ熱き珈琲
届きたる年賀葉書に添へ書きが終ひにするとはやりの言葉
箱根山走る学生ランナーの息づかひ知らずテレビ見てゐる
毎年の誕生祝ひは本と決め小四読むか賢治を送る
鬼はそと闇夜に向けて豆を撒くもはや信じる人はなければど

本間 志津子 山形

晴れわたり光あふるる大空を吹く風のあり海に沿ふ街
三階の窓に見下ろす本町の歩み慣れたる町並みが見ゆ
三階の窓の高さに鳥が来る羽ばたく近き訪ねくるるか
空に浮き上昇気流に乗りたるか鳥一羽みて羽ばたきもなし
三階の南の窓に現るる雲の動きにいとまもあらず
大空を北へとよぎる鳥の影点となるまで見送りゐたり
三階の老健施設「ひだまり」に一時入所の日々は過ぎゆく

早朝の吉原をぬけ入谷まで花の盛りの桜の並木
 雪柳レンギョウ桜それぞれの花に浮き立つわれの楽しみ
 葉と花とまばらに見せて山桜母好みたる色と謙虚を
 桃の花桜桃の花葡萄棚広くのびやか勝沼の大地
 身延山待合室の昼食は和やかなれど緊張感あり
 杖をつく夫の信念二十回輪番奉仕できたる感謝
 支え合い助けられての二十年表彰受けた三人の言葉
 事なした感謝を込めて振り返る身延の桜が遠く小さく

手首の骨折

野崎 礼 子☆ 埼玉

自転車避け損ね転び声もなく左手首を折ってしまいぬ
 背に当てる自転車はただ走り去り呆れて立てぬ道の真ん中
 手首折れありえぬ方向に曲がりたる一瞬のちに頭は真っ白
 折れし骨ぐいぐいと戻す医師の手にお産より痛いといは叫べり
 左手にはギブス硬くて重けれど指は痛みつつ少し動けり
 活動は休止となりぬそれなれど歌は詠めるとほっとしており
 包丁を使えぬ暮らし続くなか電子レンジのありがたきかな
 洗濯物干せぬ不便に落ち込めど夫の手借りて日々は回りぬ

(☆印は新仮名遣い希望者です)

四月号 四月集評

鈴木 やよい

粉雪の舞ふ国道をスーパーへザック背
 負ひてけふの運動 益坂順子
 スーパーへの買い物もザックを背負つ
 て行く。粉雪が舞うなかでも。ややも
 すれば楽な方へ流れる気持ち律して、
 日々の運動を欠かさない。その強い意志
 を見倣いたいものだ。

曾孫の訪ひ来る朝のかすかなる音の気
 配に耳そばたつる 同
 曾孫さんが来ると思うと楽しみで仕方
 がない。かすかな音の気配にも「来たの
 では？」と耳をそばだててしまう。いそ
 いそと待ちかねる心がそのままに表現さ
 れていて、気持ちが伝わる。

簡単な独りの夕餉におでん鍋今日は大
 寒ゆっくり煮込む 児玉孝子☆
 独りの夕食におでん鍋を煮込んでい
 る。少し寂しい大寒の夜かも知れない。で
 も、ゆっくりおでんを煮ているうちに心
 も次第に温かくなっていくことだろう。

指導者の澄みたる歌声心地よく楽譜追
 いつつ挑む新曲 小嶋知葉☆
 新しい曲を始めるのは少し不安かも知
 れない。しかし、美しい歌声を聞き、こ
 の曲をやるんだという喜びが湧いてきた
 ように思う。挑戦しようとする心の高ま
 りがみえる。

唐突に「おめでたうがんす」朝一番吾
 が誕生日忘れず夫は 津田美知子
 「おめでたうがんす」の言葉にインパ
 クトがある。「がんす」は岩手県あたり
 の方言のようだが、温かみや親しみを感
 じる。ご主人の優しさがこの言葉に表れ
 ているように思う。

新年の初買物は七草セットこれより始
 まる今年の支出 高藤朱美☆
 新年の始まりを買物とその支出から捉
 える視点がユニーク。正月三が日も過ぎ
 て、またいつもの日常が始まる。そんな
 気持ちのみえる歌だ。

集落の冬はひっそり暮れてゆく畑も凍
 みて春を待つのみ 松崎みき子
 冬の日の集落はひっそりと暮れてい

く。夕闇が深まるにつれて、静かな集落
 はさらに寂しさを増してゆくことだろ
 う。静けさと凍てつく寒さの情景に、春
 を待つ心が一段と強く感じられる。
 二階の六部屋空きて叔父たちは一階に
 て足る日々を暮らせり 塚本節子☆
 ずいぶん大きな家だ。かつては大家族
 で暮らしていたのだろう。その賑やかさ
 は今は無く、ご夫婦が一階だけで暮らし
 ているようだ。寂しさが漂う。

鯛焼きの膝に伝わる暖かさ寒風逃れ電
 車にゆられて 首藤文江☆
 外は寒風が吹いているが、電車の中は
 暖かい。その上、買ったばかりでまだ温
 かい鯛焼きが膝の上に置かれている。お
 いしい匂いも漂ってきているだろう。な
 んとも幸せだ。

神様を一人占めした初詣七日の朝の境
 内にひとり 金子八重子☆
 一月七日に初詣をした作者。三が日は
 参拝者が大勢繰り出すが、この日は一人
 だけ。ゆっくりお参りができて、まさに
 神様を一人占めしたようだ。

六月集

益坂順子 福岡

十年の時を隔つる山行の誘ひ受けたり浮き浮きとして
穏やかな縦走続くといふ記憶予想外なる岩稜の道
緩木山の頂に立ち標識を両手に撫でて越敷岳に発つ
県境尾根に小さき蕾もつ石楠花見つつ進むる歩み
祖母山の見ゆる峠に休むとき疲れ忘るるアケボノツツジ
突然といふがに枯れたる山椒の小さき芽を吹く庭畑の隅
感動の薄れゆくこと多くなり先輩を偲ぶ言葉の重み
曾孫の誕生知らする孫の声言葉使ひの急に変はりて
今の世の幸か不幸か生前に性別までもわかると言ふは

梶尾栄子 兵庫

忙しき家業の合間に学びたる太き筆跡躍動しをり
河川敷の黄色やさしき菜の花を大雨はすべて流し去りたり
野菜好きの夫身罷り食べ切れぬ畑に残る菜に花の咲く
榮次の子なれば榮子と名付けらる根拠はいとも簡単にして
磨りガラスの窓にほんのり桜色うつして紅梅いま盛りなり

工場の自動プレス機のリズム良き音聞こえ来る春風に乗り
沓脱ぎに寝そべる他家の猫二匹わがもの顔に春の日浴びて
お気軽な抹茶のサービスありと聞き宿の浴衣の儘でいたたく
こは怖と「真実の口」に手を入れしを投函する度思ふ彼の旅

松居光子 三重

繰り返し繰り返し視聴する動画十一歳の球児の宣誓
幼き日こはがりだつた男の孫のユニフォームの姿たくまし
長い間使はずぬたる鼈甲のブローチを思ひ出して手にとる
若き頃地味に思ひぬし鼈甲は今うす黄色のベストに相応ふ
ベストの開けるを防ぐブローチは修学旅行の子からの土産
買物のついでに一人さくら見つつ「ソロ花見」といふ新語を思ふ

岩村知康 長崎

対馬より苗木持ち来しわが庭の玄海つつじ花を咲かせる
庭植ゑのブルーベリーの咲く花に日本みつばち羽音立て飛ぶ
ひよどりの一羽が庭に飛び来たり花芽野菜を狙ひあるらし
公園の花壇の隅の藤袴伸びる茎葉をただ目守りをり
ふじばかま「頭花に蝶の渡り来」の説明板を信じ待つべし
海近き町の家並みに磯鴨の声ひびきつつ春蘭くるなり
幼き日ふるさとの磯に鳴きをりし磯鴨のこゑ忘れぬかも

湾奥の入江の空に舞ふ鳶のこゑ響くなり春の日の午後
岸の辺のさくら花咲く枝下ゆ見おろす川に鴨が遊べる

羽田 孝輝 山形

雪残る泥田に群れる白鳥はみな黙々と旅に備へをり
湯上がりのわが足下に猫来たり甲に頬擦りぐるぐる回る
雪残る軒端の隅に福寿草春は黄色とほつり顔出す
玄関に満作一枝壺に立て気持ち浮き立つ春のはじめに
町内の長たる四年勤め上げたただ安堵す四月一日
あるがまま今あるがままこの自分認め受け入れ老いと付き合ふ
醜さもものを忘るることもみなあるがままなる今ある自分

高藤 朱美☆ 茨城

凍える日韓国の親子我が家に来る朝鮮人参土産に持ちて
マイナスの気温なれども大雪は以外に降らぬとヒソウルの友言う
パイプオルガン開場告げて鳴りひびく三十二年待ちたるサントリーホールに
角野隼斗細身の体で迫力あるピアノ演奏に満たさるる夜
隣家より草餅届き餡のせてムラサキハナナ眺めつつ食ふ
啓蟄に早起きして畑仕事すれば葉裏にカメ虫を見る
抹茶を味わいながらしだれ桜見ればいつもと違う菩提寺

藤田 英輔☆ 高知

扇風機は現役のごと回りおり処分場へと向かう荷台で
夕暮れの鯨の型の黒き雲あの下はさぞ満開の傘
四肢伸べて又縮めては眠る犬浮いた肋と肉球動く
ローカルの気象予報士は転勤し四月を迎えキー局に出る
今日からの保育園へのお迎えは仕事を変えたママの役目に
暖かさ進みて八重はふんわりとソメイヨシノの散りて後咲く
三歳になれば「おむつ」と「おっぱい」を止めると言いて兎とミルク飲む
八重桜満開の頃生まれ来し三歳児と見る八重の桜を

山崎 猛☆ 埼玉

春くれば桜は変わらさず咲きにけり娘の忌日を風は寄せ来る
散るさくら肩に触れたる軽さより娘の重み蘇りくる
夕暮れのカーテンに揺るる花の影人の不在をかたちづくりぬ
咲き満ちてなお足りぬものある春よ娘ひとりの不在に触れる
春の午後サンドイッチの包み紙風に鳴りつつ娘はみえず
薔薇の花の開く大輪見るわれに行方不明の男児のニュース
風触れてカーテン白く揺るる部屋床に落ちたる光のみあり
吾行きしプラントの影映りたるイランの国とトランプの顔
夜更けてもニュースの声は途切れずに窓の外なる風音やさし

(☆印は新仮名遣い希望者です)

四月号 作品二評

井上 菅子

高層のビルのあはひに仰ぎ見る冬の真昼の青ふかき空 岩村知康

ビルの「あはひ」という狭い空間に切り取られた空の青さは格別な青。冬の冷気に引き締まった「青ふかき空」である。世話をして四年の過ぐる保護猫の呼べ

ば返事す食べながら何か言ふ 東ミチ 保護猫も四年も飼えば信頼し合う仲。自分の名前も認識しているのだ。「食べながら何か言ふ」ここが何とも言えない。もぐもぐふにゃふにゃが見えるようで。

ゆらゆらと尾ヒレをゆらし鯉たちも日なたに集う白梅香る日 安川敏子☆ 鯉の観察がいかにもので平和な光景。庭には白梅が咲き、緋鯉真鯉が泳ぐ日本画の構図で美しく詠まれた。

五分咲きの河津桜の並木道菜花も開き立春迎ふ 山本述子 テレビの映像でこの美しい光景を見たことがある。筆者の住む地域はまだ深い

雪に閉ざされながら。河津桜のピンクも菜の花の黄も、春の象徴として美しい。もちもちとした食感と仄かな苦味つや

やかな黄の銀杏ご飯 松居光子 食感も味も細やかな表現で、おいしさが共有できる。さらに下の句では色つやまで詠み、食レポ満点がもらえそう。

二月には陽ざしが日々伸びてきて心も軽く買物に出る 卯嶋貴子☆ 二月にもなれば日脚の伸びたことが実感できる。明るくことは人間の心も軽くさせる。春へ近づく季節の移ろいが「陽ざし」に捉えて詠まれた。

施設への入所の意味は理解せず会ったびに聞く母の帰りを 藤田夏見☆ 入所の意味を理解できない子も、会うたび説明する作者も、双方の立場の切なさが必要な言葉のみを使って訴える。

秋蒔きし人参わづか地に残りて雪をかぶれば甘味増しをり 水澤タカ子 取り残しの人参が雪の下で甘みを増していた。わづかでも思いがけない収穫と、その甘さの感動が伝わる。

陽のさしたタライに氷のきらめいて季節を分ける今日は節分 藤田英輔☆ 節分の翌日は立春。それを意識したように明るく日差しにタライの氷もきらめいている。春を待っている心で捉えた。

「氷のきらめき」は歌をもきらめかせた。

雪囲ひしたる軒端にはこべ萌え七草粥を作りたる朝 奥山清子 雪囲いの下に生える小さなこべも、雪国では貴重な緑。新鮮なこべを入れて七草粥は美味であり、無病息災を請け合ったことだろう。

夕刻は日足伸ぶる感ずれどまだまだ朝は暗いし寒い 羽田孝輝 冬至を過ぎると、わずかずつではあるが日足が伸びる。二月頃は夕方の明るさを感じられるが、「まだまだ朝は暗いし寒い」実感の込もった口語が生きた。

犬用のケーキは高しと嘆けども電話に友の声弾みをり 井出裕子 犬用のケーキは高いと言いながら、電話に声を弾ませるところに、友の愛犬がぶりをうまく捉えた。

四月号 作品一評

江波戸 愛子

発表会の写真残るも今はもう置物となる娘のピアノ 梶尾栄子

嫁いで家を出た娘さんの弾いていたピアノを見ながら発表会を見に行ったことなどを懐かしく想い出している、下の句に作者の寂しさが伝わってくる。

県民の悲願などとして叫びつつ新幹線は開通されつ 岩村知康

新幹線が開通すれば県民の方々はとも便利になり、他県から訪れる方々も増えてくる。結句に県民の悲願が叶った大歓声まで聞こえてくるようだ。

冬の日の南京櫺の並木には白き実の照る長崎の街 岩村知康

冬日に輝く南京櫺の白い実のある長崎に住みその街を歩くたのしみが伝わる。

大雪に馴れてる筈の吾も友も心細さを嘆き合ふなり 東 ミチ

大雪の怖さを知っている作者だから詠める歌。嘆きあう友のいる喜びを詠む。

「長生きしろ」と声掛くる兄に頷く弟の涙の面会も僅か二十分 佐藤幸子

関西の施設に暮らすご主人の弟さんにお会いに行った日に詠んだ一首久しぶりに逢えた兄弟なのにと面会時間の少なさを嘆く作者の気持がよく判る。ご主人とその弟さんへの思いが伝わる。

ゆらゆらと尾ヒレをゆらし鯉たちも日なたに集う白梅香る日 安川敏子☆ 白梅の咲く頃はまだ池の水が冷たいので水面付近が温まると水面近くに浮かんでくるらしい作者はそれを知っていたのだろう。鯉をみる目が優しい。

冬期にもグランドゴルフの競技為し楽しめたるは有難かりき 山本述子 冬の時期は屋外での年配者のスポーツは休みとなる事が多いのだがグランドゴルフは冬でも休まず競技を楽しむことが出来る、その喜びと感謝の思いを詠む。

二月には陽ざしが日々伸びてきて心も軽く買物に出る 卯嶋貴子☆ 下の句に作者の待ちにまつた春の陽ざしを感じる喜びが伝わってくる。

当選の二年連続一枚も無し年賀はがきの楽しみなれど 松居光子

当選の確率は低けれどもしかしたらと期待してしまう。二年連続一枚もないということはその前には当選していたのだろう。年々賀状が少なくなってきた寂しくおもうことがある。

氷点下の朝毎赤赤ストーブ義兄が姉に残したる薪 井上鈴子

山形県にお住いの作者は先に逝かれた義兄が姉に残したストーブの薪に義兄の姉への想いをあらためて識ることのできた思いを詠んで読む側も胸が熱くなる。

去年の秋共に古稀を祝ひたる旧友逝くをラインは告げる 羽田孝輝

同年の親しい友の死をラインに知った時の驚きと悲しみが読む側にも伝わる。固定電話詐欺に注意をする為に解約せむか迷ふこの頃 井出裕子

詐欺電話は固定電話に多いように感じる。知らない番号のときにはその番号を調べると詐欺電話が多いようだ。わが家はいつも留守電設定にしている。

作品二

稲瀬川の石碑

桜井 美保子 神奈川

万葉の歌に関はるいしぶみをけふ見むと行く鎌倉長谷に
折り畳み傘は強風に煽られて役には立たず雨の国道
強風に雨の混じれる由比ヶ浜寄せ来る波に乗る人らをり
稲瀬川の石碑やうやく見つかりぬ由比ヶ浜の国道沿ひに
横書きに刻まるる文字「稲瀬川」右から左へゆつくりと読む
海に注ぐ細き流れの静かなり古代は呼ばれき美奈の瀬川と
潮満つる川を渡りて逢はむとする恋の心の生まれし風土
月一度のペースにて書きほそぼそと続けて来たり「広報手帳」
東歌に残る一途な恋心まぶしくもあり齢かさねて

東 ミチ 青森

満月の筈の夜空をあふぎみる一面灰色にてわびしかり
豪雪に折られ散らばる桜の枝を咲かせてみたく甕に水張る
甕に挿す桜の枝の芽吹き見て我の心が少し前むく
雪塊の消える庭ぬち掃除する身体の衰へ実感しつつ

年越しに活けし花なり葉ボタンの二度目の茎に蕾ふくらむ

卯 嶋 貴 子 ☆ 東京

三鷹まで中央線に乗りて行く夫の車椅子押して病院までを
早咲きの桜満開の病院を囲みて連翹・雪柳咲く
十年以上上夫の通う杏林病院車椅子押す吾は初めて

佐藤 幸子 山形

薪ストーブの前で籠編む夫の背此処がいちばん落ち着くさうな
水みちの泥上ぐる人らの軽トラの三台見えて風の冷たし
亡き母の唄ひし「桜井の決別」けふ唐突に口衝きて出づ
唄にあはせ鞠つき遊びし友なりき六十余年経て今はいづくに
配達員のバイクの音の軽やかに三月晦日空に鳶舞ふ
顔の染み三つほど隠し朝の鏡覗けばちらり白き生え際
さしも草ヤブカンザウに蛍袋四月の雨が緑濃くする

藤田 夏 見 ☆ 広島

平日の昼夕届く弁当に二人の暮らし支えられ居る
調理出来ぬ従兄の妻の冷蔵庫黙ってほかす生ものあり
ヘルパーより報告ありて母と子は肉と魚を今日も買い来る
今だけは好きに買ってね遠く住み支えきれぬを詫びつつ思う
ただ顔を見れば気の済む母と子に立ちあいおりぬ施設のロビー

自宅にはもうすぐ帰ると子に告げて施設の部屋に戻りゆく母
過去は消え今だけ見つつ微笑みて施設に生きる従兄の妻は

早乙女 イ チ☆ 栃木

キンカンの下に生えたる白百合の新芽のびの花咲くを待つ
つばきの木をほしがる友に挿し芽して小さな鉢に毎日水やる

山本 述 子 神奈川

夜の雨たつぷり含み青空に映ゆる数十本の桜満開
藤棚に開花の兆し見え初めて桜に代り花房垂るる

小雨日にグラウンドゴルフの誘ひあり気合に満ちた面揃ひをり
雨の中で急ぎ乍らも黙々と打てばスコアの良くなりをりぬ

小六の礼の手紙の末尾には後輩のこともよろしくとあり(スクールガード)
出来ること何かないかと思ひつつ祈るのみなり「復興祈願」

児 玉 孝 子☆ 愛知

寒肥をやると息子の声かかる珍しきひと言に施肥のできたり
寺領に咲く桜を囲み「そばの会」老いも仲間に誘われ興ず

去年植えしスカシユリの鉢に新しき芽の立ち初めて肥やしをやりぬ
スカシユリ鉢にせましと葉を広げ春日を受けて伸びるを見守る

補聴器を買わむと決めて店に行く一週間馴れよと両耳につける
補聴器付けテレビのボリューム驚く程小さくなったと息子に言わる

加藤 富 子☆ 栃木

つれあいの春の彼岸に悠君と二人して行く花と線香持ちて
悠君の後追いて亮君も入学す祖父の愛した佐附中学に

じいじがいれば喜んだよね二人の孫は仏壇に向かいて鉦一つつ
つれあいが十九年勤めし佐野高校二人の孫は今日入学式

合格の祝いは一泊旅行なり亮君の希望に沿いて計画す
妹家族と待ちあわせての墓参り母逝きて十五年過ぐ

奥山 清子 山形

友呉れたる啓翁桜咲き盛るふつくり優しき薄桃色に
雛飾り姪が作りし和紙人形砧打つ音弥懐かしや

置なはる西山峰の残雪の輝きを背に夫孫眠る
墓前にて供へのケーキ分けて食み昔を語る彼岸中日

息子の車右に折れたる後を追ひ手を振りてをり今度いつ来る
亡き友と訪ねしガマの湯名を替へて建て替へて今日閉館となる(三月二九日)

吹雪くなか夫と息子と身を結びサンゲ坂滑りし勇姿を偲ぶ

小嶋 知 葉☆ 茨城

年一度集いて語る「らんの会」職退きて後の再開うれし

幼子のかわいさ語る六十代園長の日々楽しと言えり

ゆつたりと流れる日々の彩りに短歌とコーラス続けていきます

春色の和服姿に歓声があがる八十半ばの先輩
女化の郷に咲きたる満開の桜ながめる二時間半を
伝説のキツネどこかにいるようでにぎわう春の女化神社

立石 節 子 ☆ 東京

枯れ庭の片隅占める木香薔薇黄に輝きて主張するなり
独裁者怖き主張を繰り返す自己顕示欲止める者なし
徘徊の老人捜すというゲーム笑う中にも真剣さあり

水 澤 タカ子 山形

畠作りもうせぬが良いといふ長男にせがみ求め来る春の種物
月山を遠くに仰ぎ春耕の雨後の畠に春菜を蒔けり
種まけば自づと芽の出で背を押さる数を減らして今年もやれる
親鸞さまの銅像わきの蠟梅の透き徹る色に癒やされをりぬ
東書道会天童支局の研修会に一関より講師を迎へる
かな書道を日本遺産にと願ひこめ共に着けたり朱色のバッチ

野 口 秀 子 山形

亡き友と来たりし宿に十年ぶり娘と孫らと想ひ出湧きく
木蓮の蕾をひとつ瓶にさす静かに静かに膨らみゆかむ
久しぶりに会ひたる水戸さんは艶やかな面差しながら病あるらし
高校の旧き友人山形より来ればしやしきしやしき鋭利な語り

広き夜空に光り輝く星あまた目を向けてみる春の宵なり
紅花染め絹織物のいと床し享保・古今雛歳月を経て
窓際の楓の葉群色の濃く日毎伸び行く夏に向かひて

井 出 裕 子 静岡

隣り家のシャッター開く音を聞き我も床出て一日を迎ふ
隣り家の飼ひ猫探しの貼り紙に十九歳のチビ写真に収まる
隣り家の飼ひ猫探しの貼り紙が剥がれて風にばたばた乱る
富士山と雲なき空と満開の桜の庭はマイビューポイント
近頃は友との会話に断捨離の遅々と進まぬをこぼすこと多し

塚 本 節 子 ☆ 茨城

夫の手術終わりたるまひる風止みてしだれ桜は咲き初めにけり
三月三日女兒生まれしと息子よりライン届きぬ夫退院のあさ
みどり児を代わる代わるに撫でながら小さな姉妹の頬のあからむ
信楽の壺に生けたる庭の木瓜春の夕べの部屋を彩る
川土手の桜並木を車にくぐりゆく朝ひかりやわらか
堤ゆく道の両側花ひらき春の匂いの満ちておりたり
川面へとこぼれて流るる花びらを車をとめてしばし眺めぬ

井 上 鈴 子 山形

雛祭りとは皆既月食重なりて窓を開ければしんしんと雪

兄在らば喜寿だと言ひて乾杯と声を揃へむ春浅き夜

「われはもう見守るのみ」と兄言はむ我が家が集ふ孫の顔見て
我が家に遊びに来たら兄の背に軟膏塗りたしも一度塗りたし
空き家にも大きな傘福飾りたる甥と娘ら兄に見せむと
閉校式終はりて腰痛む息子置き帰省子と行く雪残る墓
帰省子を任地に幾度も見送りぬ最後はわれを送りてくれむ

安川 敏 子☆ 埼玉

この角で歩をゆるませて深呼吸沈丁花の香り今が最高
桜の下の上り下りの舟二艘行き交うときに笑顔を交す
美味しそうに柿の新芽が出そろって若葉の天ぷら甘き実思う
若い時競って染めた反物の紅型染めの現地に行きたい
晴れの日は風に負けずに歩を進め雨の日は家の階段上下す
柚子と甘酢で味付けしたるかぶ漬けをひとり満足「うまし」と食べる

津田 美知子 岩手

怠けたる吾の筋肉戻さむとジムに通へどなかなか成らず
体力の弱くなる身を励まして世話にならぬやう階段登る
常よりも半月遅れの鶯の初めての声「ホホホッ」と鳴く
「あの人ね」と夫は話し始めたり座頭市役の名思ひ出せずに
突然の大きな地震起こる度都会に一人の女孫を案ず

松崎 みき子 岩手

耳遠く聞き取りづらいと夫が言ふ激しい雨も知らずに寝たと
野菜種選ぶ夫の長きことホームセンターの端に待ち居て
入港の船を待ちある老人は肩を丸めて風流しゆく
寄り道して花見しますと言つてみる桜並木が美し過ぎて
春彼岸ぼた餅供へる仏壇に線香匂ひ日ざしゆるやか

金子 八重子☆ 千葉

客二人乗せて大型バスの行くガソリン価格最高値の日に
冷酒をちびちび飲みたい昼間から今年も見上げる満開の桜
壁一枚の隣に住んでいる人と半年ぶりの挨拶をする
検診の結果は一時忘れ去りケンタッキーをがぶりといきます
仕事終えタイムカードを打つ時に安堵と疲れの呼吸深くす
十年前「また仕事か」と言つて居り「きょうも行ける」に今は変わりぬ
満開の桜に嵐は容赦無く傘はおちよこで濡れて帰りぬ

首藤 文 江☆ 埼玉

糠漬けの程良く漬かり安堵して愛しみながら撫でてかき混ぜる
木蓮も雪柳も咲き水光り四時の時報に「春の小川」流る
自宅から桜並木を見下ろせば笑いたくなる春だけの景
どこまでも桜桜と桜が続き引き返せない見沼回廊

冬雷集

須藤 紀子

四月集

中村 哲也

掛くる眼鏡のうちに鮮明に眼見え「目力」といふ光を感じず
 大山 敏夫
 よしやるぞの気概を持ちて新年の神棚に酒をあげつつ祈る
 兼目 久
 南天の赤き実そつと口にする空青く澄み春のきたるか
 有泉 素子
 山椿の葉群の揺れに弾かれる残雪散り来細雪のごと
 吉田 綾子☆
 日の当たる石のぼりゆく冬の蜂生死の境さまよふごとし
 天野 克彦
 音のなく残り時間の減りゆける庭の蠟梅朝陽に透けて
 嶋田 正之
 再発を医師つげくるも補聴器を忘れた母に聞こえぬらしも
 楠 美千代
 離れて祖国を思うひと並ぶ平日の朝の在外投票
 ブレイクあざ☆
 頻り降る牡丹雪吸ふ海の面を今し昇れる初日輝く
 田端五百子
 花瓶にて年を越したる百合の花最後の蕾がおほらかに開く
 鈴木やよい

わが町にこの年初の雪舞ひて人通りなく妙にしづまる
 益坂 順子
 簡単な独りの夕餉におでん鍋今日は大寒ゆつくり煮込む
 児玉 孝子☆
 セニアカーは歩く人よりやや早し前行く人を追い越して行く
 児玉 孝子☆
 コーラスのあとのランチとトークにも生きる喜び三時間ほど
 小嶋 知葉☆
 「ばば今日で何歳なの」と言ふ男孫「ずつとずつと長生きしてね」と
 津田美知子
 晴天が続きて窓辺のハイビスカス次々咲きて冬を忘るる
 高藤 朱美☆
 赤と白の南天の実に積る雪午後には溶けて小さき実ひかる
 松崎みき子
 市役所の玄関前のならせ餅紅白花のごとく揺れおり
 塚本 節子☆
 帰宅してぬくもり残る部屋の中一息ついてレモンティーを飲む
 首藤 文江☆
 姉の句を読み返しつつ細枝に貼り付く雪を飽きずに見ている
 金子八重子☆

四月号 十首選

四月号 十首選

作品一

石渡 静夫

作品二

大塚 亮子

作品三

天野 克彦

日米の和親条約ゆかりの寺歴史を偲べと白梅句ふ
 桜井美保子
 願ふこと恙なくあれと夫と我堤に立ちて初日をろがむ
 倉浪 ゆみ
 残された短い時間を良く生きよ天から声す読経に混ざりて
 林 美智子☆
 大寒に公園の紅白梅は咲き蠟梅も香るそこは早春
 伊澤 直子☆
 義母の持つ元気の底力ドクターも信じて勧め病の治療
 村上 美江
 窓に見る葉も無き梅の枝振りを目毎眺めて春を待ちおり
 乾 義江☆
 かにかくに悩めることの多き日は熱き湯に入り洗ひ流さん
 松本 英夫
 搦き立ての白米ニキ口購ひてそのぬくもりを暫し抱きをり
 須藤 紀子
 座布団を枕に眠る孫娘その母に似るクセも仕草も
 高橋 耀子☆
 年月は味に深みと旨味添え味噌を舐めつつ人もまた然り
 野崎 礼子☆

飲み残る数多のサブリ生きたしと願ひたる夫の無念を思ふ
 梶尾 栄子
 高層のビルのあはひに仰ぎ見る冬の真昼の青ふかき空
 岩村 知康
 朝空に懸かる月あり正月六日今年最初の清しき眺め
 東 ミチ
 ゆらゆらと尾ヒレをゆらし鯉たちも日なたに集う白梅香る日
 安川 敏子☆
 点数を気にする程の技もなく参加のみにて月日過ぎたり
 山本 述子
 残りたる正月用の銀杏を炊き込みご飯で再び味はふ
 松居 光子
 施設への入所の意味は理解せず会うたびに聞く母の帰りを
 藤田 夏見☆
 秋蒔きし人参わづか地に残りあて雪を被れば甘味増しをり
 水澤タカ子
 春待ちて菜花を茹でる夕餉にも雪降り積もるニュースのありぬ
 立石 節子☆
 雪囲ひしたる軒端にはこべ萌え七草粥を作りたる朝
 奥山 清子

中二の時師に勧められ読んだ本「こころ」を生涯どこかに引きずる
 新井 光雄☆
 畑の友が訪ねて来たり手土産に梅の蕾を一枝持ちて
 越澤 太朗☆
 寒宵の北浦の湯は最上階対岸の灯の点々とともる
 後藤 恭介☆
 積む雪に潰されまいと暮らし居り薪ストーブの焔囲みつ
 松田 忠一☆
 懸命に雪掻きしたるこの疲れ老いの実感じわりと出づる
 長谷川 剛
 塵捨てに来れば小さな足跡あり獣の跡と思いつつ見る
 長澤千恵子☆
 穏やかな陽差しの中の枝枝に積もれる雪の丸くやさしく
 今野 澄子
 木目込の干支作りいる六人の会話は弾む師走のひなか
 河原木光子☆
 寒中に晴れたる今日は裏山に猿五匹あて木の皮を食む
 児珠 純子
 立春のあとに大雪寒いけど春が近いと思えてうれし
 鈴木 祐子☆

●島木赤彦研究会は昭和45年に設立。支部は昭和49年に長野県支部として設立。
 ●会長 高橋 克
 ●島木赤彦研究会は、近代日本文学および、近代教育における島木赤彦の業績の資料保全と、調査研究を目的としています。
 ●そのための研究活動として、研究大会の開催・資料展示会・東京例会・支部研究会などを行っています。
 ●投稿などの機会が得られます。

●(年会費二五〇〇円)

●本部事務局

江戸川大学 中島金太郎研究室内
 〒270・0198
 千葉県流山市駒木四七四

☎ 〇四(七二五二)〇六六一(代表)

中二の時師に勧められ読んだ本「ころ」を生涯どこかに引きずる

新井光雄☆

夏目漱石の小説「ころ」は人間の面に潜むエゴイズムを描き出した名作です。中学二年生の時に読んだ作者の心に深く残ったのでしよう。

雨降らずもうもうと立つ土煙大根の敵作りたる後に
越澤太郎☆

今年の冬は記録的な小雨でしたが、そのためこういう風景も見られたのでしよう。敵を作った後の土煙が印象的です。この作品を読んで、ミレーの名画「種まく人」を思い出しました、

寒風に佐原の雑貨店散策し昭和の時代と小江戸を味わう
後藤恭介☆

千葉県香取市の佐原はいまだに風情のある街並みが残っているようです。肌で感じた寒風が一首を引き締めていて、散策の気分を出しています。

雑司ヶ谷の墓地の近くが下宿先真夜中遊んだ漱石の墓
新井光雄☆

意外性ある下の句に引き寄せられる。作者独自の経験に基づいている。学生時代近くに下宿し真夜中に日本の大文豪の墓の前で遊んだという。「遊ぶ」には様々な意味が含まれるのだろう。教科書にはよく「ころ」が採用されていた。Kの自殺発見の場面が衝撃的だった。

雨降らずもうもうと立つ土煙大根の敵作りたる後に
越澤太郎☆

この作者の歌には農業に真剣に取り組みその日常を楽しむ姿勢が現れていて励まされる。羨ましくもある。心掛け次第なのだ。土を起こして敵作りをした際、雨が降らないので風が吹くと土煙がもうもうと立つのだ。なんだか楽しくなる歌だ。この明るさが読者を励まし救われる。

寒宵の北浦の湯は最上階対岸の灯の点々とともる
後藤恭介☆

朝靄に霧氷の林清々し遠い山脈の新雪を背に
松田忠一☆

こういう素晴らしい景色に出会って短歌に残したいと思っても、なかなかこの作品ようにはうまくいかないものです。

散髪を終へたるのちにいつも行く書店で手に取る断捨離の本
長谷川 剛
散髪を終えた清々しい気持ちで、断捨離の本を手にとっています。散髪を終えるときはらくは散髪の心配はありませんが、断捨離はどうなのでしょう。

青い空折見える色だけど籠もる私を
ほっこりさせる
長澤千恵子☆

青い空は窓から見えるのでしようか。曇りがちの空模様の時折陽が差すようです。憂うつな気持ちで籠っていたのに、青空を見てほっこりとする心の変化を感じます。

除雪後の夫に好物の牡蠣鍋を作らんと
してキッチンに立つ
今野澄子
雪国で生活する人にとって除雪作業は重労働なのでしょう。労働を終えたご伴

湯宿の最上階にある浴場なのだ。昼はきつとすばらしい眺望なのだろう。昼とは全く異なる夜の情景。叙情的な下の句の景が胸にしみる。

紀伊国へ嫁ぎし妹の贈りくる八朔食め
ば薫り立つ春
松田忠一☆

やわらかな調べが心地よい歌。春の風のような。紀伊の国が効いている。兄思いの妹さんなのだろう。感情の流れが下の句に向かい潮のように寄せてくる感じだ。さわやかな八朔の香りに乗って。

北国の雪降り続く裏通り合図を交して
て車が行き交ふ
長谷川 剛

雪深い地方の冬の日常が活写されている。両側に除けた雪の壁ができて裏通りなどは道幅が極端に狭くなる。交互通行に近いのだろう。車同士お互いに合図し協力し合ひすれ違ふのだ。なんとマナーが良いかと思うが、事故や渋滞を防ぐ雪国の人の生活の知恵なのだろう。

雪晴れてヘルメット姿の夫等は身振り
手振りで屋根より挨拶
今野澄子
こちらも雪の多い地方の人々の生活の

侶に何かしてあげようとする作者の心情が素直に表現されています。

品切れの蕎麦の代わりにたのみたるハ
ンバーグ定食に赤ワインソース
河原木光子☆

蕎麦屋さんに入ったのに蕎麦は品切れだったようです。その代わりにたのみたのがハンバーグ定食とは、ユニークな蕎麦屋さんの雰囲気を感じます。

相棒の五歳の人形きゆうちゃんを習ひ
しあかり師の腹話術の技
児珠純子
腹話術は人形を使って一人二役を演じる難しい芸のように思われますが、難しさを感じさせずに笑いをさそうのが熟練の技なのでしょう。この歌の背景にも、そういう難しい技が潜んでいるように感じました。

霜を踏み音をたしかめ通勤路朝の寒さが
が少しほだける
鈴木裕子☆

霜を踏みむときのザクザクという音が快く感じられます。通勤に毎朝通る路に、寒さが少し和らいできたのを察知しています。生活感のある作品です。

歌。避けては通れない屋根の雪下ろしの労働である。ヘルメットを被りご近所皆で協力し合って作業するのだろう。屋根の上の夫君らに日が差して何とも頼もしく見えたに違いない。

腹話術使ひてわれは若き日に交通安全
指導をしたる
児珠純子

腹話術のプロの師についてその技を学ばれたとは本格派である。相棒は五歳の人形きゆうちゃん。その技を用いて腹話術でされたという交通安全指導。さぞ子供たちは喜んだことだろう。そんな指導なら筆者もぜひ受けてみたいものだ。

骨折にも入院拒み続ける母の言い分
猫が大事と
鈴木裕子☆

入院を拒む高齢者の理由の一つに飼育している犬や猫を置いて行けないからと聞くことがある。一緒に暮らしている猫は母君にとつてもはや単なるペットではない。コンパニオンアニマルという家族同様な心の支えなのだ。その気持ちを汲み無理強いることなく優しく見守る作者。どうか拗れませぬようにと願う。

作品二

気の向くまま

新井 光 雄☆ 東京

トーストを口に啜えてあほ面でガザをみている無意味な同情
鬼平に斬られる悪も妻子持つトランププーチン似たようなもの
人生を出来るものなら逆走し大学生からやり直したい
買っただけ資本論様まだ鎮座あの頃友らは完読してたに
明るいぞどこか怪しい妻の声油断できない何か企む
高市首相明るい顔で武器輸出お次は何だ核の武装か
光りをと叫んだゲーテと同じ年八十二歳確かに真暗
ラーメンをツマミに昼酒ハイボール外聞なしに町の中華へ

後藤 恭 介☆ 茨城

寒戻り体のふしぶし痛み出す負けずに朝の体操に行く
病得て健康の大切さ知りてより日々の生活リズム正しく
休日のイオンモールは人多ししゃぶしゃぶ食べて元気をつける
テレビに見るミラノ開催の冬五輪日本選手の華麗な演技
春来る牛久シャトーのワイン祭各地のワインと子供のダンス
アルパ聞くウルグアイのコンサート明るい音色のコーヒールンバ

「歌集『渚』鑑賞」を読み終えて著者の深掘り心に残る

越 澤 太 朗☆ 茨城

青大将脱皮を終えて柵を越え朝日の中を林へ消えぬ
住み着いて十年になるトラちゃんは居眠りしつつ春を過ごしぬ
木蓮はあつという間に盛り過ぐ残りのひとひら臉に留めん
トラクターオイル交換クーラント夏の野菜の耕運始む
春菊は臺立つ前に収穫すポチンと折れる先を食すと
マスカット巨峰の二本ハウス内に蕾膨らみ楽しみ増しぬ
庭先の牡丹の蕾こぶし程濃淡の花楽しみ待つ
連休は友と集いて恒例の山菜パーティー菜の花盛り

長谷川 剛 山形

降る雪は車のライトに浮き出でて静けき山野を銀色に染む
燃えるゴミ今日は出す日と責付く妻今は懐かし新婚のころ
寄宿舎に入寮せむと旅立つ朝写真撮らむと言ひて孫来る
電子音あちこち飛び交ふ朝餉時間き分けて動く妻は超人
白川の湖面に突き出るシロヤナギ春来るを告ぐ緑の水没林
幾星霜妻の作りたる朝餉食む朝のひかりを馳走にして
満開の梅花を散らす温き風春の便りを運びて来たり
田起しの耕運機の音銜して餌を啄む鳥あとを追ふ

長澤 千恵子 山形

啓翁桜の切花届き花を見て若葉もうれし子からのメールも
未だ寒し灯油不足は身に堪へ暖かくなれと天仰ぐ日日
庭の角の露のたうは春の味そつともらひて露味噌作る
やはらかき風に吹かれて墓参り冬の汚れを流して洗ふ
街道の辛夷一輪見つけたり早早と咲く町のシンボル
春の来て養花雨降りぬこの節は草花育つゆたかなる日日

今野 澄子 山形

花苗の色とりどりに並びみてスーパ―前はガーデンのやう
シヤキシヤキと雪中キャベツの甘き味丸ごと調理は雪国の知恵
雪解けてダリア畑の土作りよき花願ひて燻炭撒きぬ
日溜りの苔を啄む雀二羽仲間呼び寄す春のうららに
ひと言に苛立つわれにラベンダーの香りやさしく心鎮まる
雪解けて夏水仙の葉伸びたれど彼岸の雪は無惨に覆ふ
吾妻山の白馬の騎士の雄々しさは雪溪つくる雪の芸術

松田 忠一☆ 山形

幽玄の雪灯籠の揺らめきよ遠い昔にいぎなう如く
妻と摘みし雪解の畑地端のふきのとうの天ぷら食めば匂の香の立つ
夕餉どきの春雷停電三時間ろうそくの灯の懐かしき夜

靄る里の五分咲きさくら雨にけむる晴れの明日を祈る夕暮れ

桜ふぶき野良に人影まばらにて瑞穂の郷に巡りくる春
黄昏れて田毎の散居村蛙鳴く声天に沁み入る

受け継がれたる祭り囃子の列がゆく稲穂幼き田中の道を

児珠 純子 山形

薪を焼べ五右衛門風呂に入るとふ米寿の人は近所に住まふ
薪燃える匂ひ漂ふ朝の道歩いて五分のポストに向かふ
薪仕事一年通し見てをれば人の営みの尊さを知る
外国の原油に頼るエネルギー百年前は薪使ひしに
有事無き平安な国なればこそスイッチひとつで温もれる朝
化石燃料地球の資源は限りあり石油は約五十年とふ
大切に使ひゆくべきエネルギー紛争多きに心の痛む

河原木 光子☆ 広島

十二人の手術予定の一番と呼ばれてたちまち緊張の増す
血圧の上昇にて不安つのれども白内障の手術無事終わりたり
眼帯を外したとたんにクリアーのスプレーひと吹きしたごとく見える
手術後にわれ使いたる保護めがねはかつて姑の使いしものなり
手術後の洗顔やめて三日目朝に指に感じる肌の硬さよ
去年よりも少し早いと軒下のつばめを眺める三月末日

お知らせ

小誌では東京本部歌会を休止しております。現在は、桜井美保子氏担当による「HP ネット歌会」を開催中です。希望者はホームページをご覧ください。

実際に対面しての歌会は、左の通りです。
冬雷川越歌会

「川越 西口より徒歩五〇〇メートル」
J R 川越線・東武東上線
ウエスタ川越 二階 会議室 3
午後1時〜4時半まで。

川越歌会は発足してより一年を過ぎたところ

で、参加者は少人数です。毎月大山が出席します。三月の時は、東京より編集委員四名が参加されかなり活発になりましたが、一転四月の時は、怪我をする人、都合の悪い人が多くて六人の参加でした。新しい人の参加をお待ちします。なお、出席希望者は左の担当者までご連絡ください。

連絡先 安川敏子 (090-4608-7265)
野崎礼子 (090-9971-8149)

久々に夫のバイクに二人乗りしただれ桜を見んと出かける

和田 妙子 山形

万葉の歌に詠まれし梅の花我が家の梅も咲き出でてをり
老いてなほ楽譜の読める幸せを幼きころの我に告げたし
母植多し苧環すでに失せたるも樹木に花は今年も咲けり
地植多し花育てられずに失せゆくも枝垂れ桜は満開に咲く

鈴木 裕 子☆ 千葉

桜はまだ八分でも見に行きたくてスニーカーの紐結び出かける
いつもの路線バスに高校生が増えて四月がきたと実感

たけのこを下茹でしつづつ思いめぐる炊き込み飯か天ぷらもよし
姪からの出し帛紗にはとびうさぎその名のごとし跳ねて嬉しい
ペランダに干したシャツの乾きよし取り込む布団も太陽の匂い

塩野 伸 山形

信号の量けて薄くなりてより白内障は友達となる

「ほら咲くよ」春告花は枝先に二輪三輪今日に明日に
いつまでも片付けられぬ春炬燵猫の居ぬ間にそそくさ仕舞ふ
ピラルクは餌の金魚に飛びかかり太古の眼の水爆せる音

倉田 ひろみ☆ 広島

「城はない城址はある」と応えたる桜祭りの屋台の店主

石仏も礎石も白も石垣に転用したる秀長の智恵

石垣の「逆さ地蔵」はうつ伏せて二度目の役を果たしおりけり
ほの甘し桜祭りのスタツフの教えてくれし御城口餅

ぎゅう詰め近鉄電車に長いこと揺られ着きたり吉野は遠し
難波から今朝のニュースを見て来たと中千本のバス停で聞く


鈴木 知 子☆ 埼玉

正座でと貼紙あれど迷わずに椅子に坐りて写経体験す

幼き日銭湯で見た刺青の極彩色の龍を忘れず

前の日に指で音頭を取った母思わなかつたよ亡くなるなんて
早朝の神社の白砂清められ踏み込めぬ程凜と鎮まる

2026年度常設展
いのちを継ぐ—農業と詩歌



2027年3月14日まで
入場無料

日本現代詩歌文学館は、
全国で唯一とつ詩歌専門の総合文学館です。
日本の明治以降の詩歌資料を
有名無名にかかわらず収集・保存し、
様々な活動をおして
詩歌の現在を発信しています。

◆ 記念講演 伊藤一彦
北の歌人と南の歌人
歌木と歌木を中心に

第41回詩歌文学館賞贈呈式
5月23日(土) 15時
日本現代詩歌文学館講堂

【詩部門】小林増城
【落下歌】
「vergandacht」(思郷社)
短歌部門 春日真木子
【宇宙理】(角川文化振興財団)
【俳句部門】西村和子
【素秋】朝出版

【開館時間】9時~17時
【休館日】月曜日・年末年始
(ただし月曜日が祝日等の場合は開館)
【入館料】無料

日本現代詩歌文学館
〒024-0093 岩手県北上市本石町2-5-60 Tel 0197-65-1728 Fax 0197-64-3621
URL <https://www.shikabun.jp> E-mail shika@shikabun.jp

大山敏夫

中富大輔（大友の新国劇時代の名）は昭和十一年秋に新興キネマにスカウトされ映画入りを決めたが、これは本当に幸運なこと、その経緯を取り纏めると、最初新興側が指名したのは宮本曠二郎だったという。ところが理事の一人が宮本を重用し、手放したくないとの理由からお鉢が回ったのである。

師匠と呼ばれて告げられる。

「俺が元氣なうちはお前は一生俺を越すことはできない。いつ迄経っても、うだつが上がらんという事だ。お前はいつになっても主役を演れんぞ。それにな、いつも言っているようにお前はセリフがまずい。特に長いセリフが持たない。その点、映画はカット、カットで細切れ撮影する。アップの表情でセリフを使わんこともある。しかし

舞台はセリフが生命だ、派手な殺陣は別として、細かな動作だけではうしろの観客には全然伝わらん。だから、映画に移る話、お前にはチャンスだぞ。」

（森田眞寛「瀬戸内の草光」より）

新国劇時代で主役は勿論、脇の名のある役さえほとんど演じていないのはこのセリフ回しに課題があり、任せられなかったようだ。師の辰巳柳太郎は核心をついて話し、中富大輔の退路を絶った。

ほぼ一年余り前に、やはりスカウトされて「日活」へ転身した黒川隆のときは、長谷川伸が「弥太郎」の名を与えたり、大いに祝福されていたのでやや違うようだ。横浜磯子の出身の黒川弥太郎の新国劇入りは昭和八年であり、中富大輔が大部屋俳優となった年。その後黒川はどんな名のつく役を任されてゆき、いち早く映画界へのデビューも遂げたのだ。

新興キネマとしては狙った人材ではなかったものの、この未知の新人の獲得をどう活かすかに知恵を絞る。この辺りの

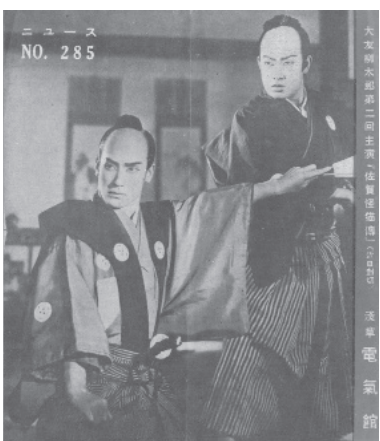
ことを歌人千頭泰が詳しく調べて記している。千頭はみずからの編集する雑誌「幻燈我楽多館」（93年 新年号）巻頭の「大友柳太郎覚書」の中で、

さて新興キネマは新加入の大友柳太郎を売り出すに当って、まず女性の観客に目を付けた。

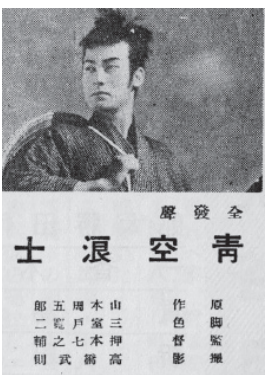
として（大友柳太郎後援の大友婦人会・会員募集）に打って出たと述べ、千頭はその画像も誌面に貼り付けている。更にこのようにして第一回主演作「青空浪士」は昭和十二年正月に封切られた。十二年には前記のほか「佐賀怪猫伝」「吉田御殿」「勤王田舎侍」など全八本に主役をつとめ、つづいて十三年には「静御前」ほか全九本に主演している。

新興キネマの作戦は大きな話題を作ることもあった。大友柳太郎の撮影所入りは、飛行機と自動車のパレードという際立つ演出で周囲を驚かせた。山田五十鈴をはじめ女優陣も揃ってそれを迎えるという御膳立て。そして大友も見事に応

えた。昭和十二年一月公開のデビュー作、「青空浪士」では人気女優だった山田五十鈴との共演。新興の直営映画館だった「浅草電気館」の当時のパンフがある。表紙は主演二作目の「佐賀怪猫傳」の大友の初々しい姿（左画像）。



浅草電気館ニュース No.285



このパンフを開いてみると、映画界に入っの抱負を語る大友の挨拶もある。また上映中の「青空浪士」のキャストやあらずじも紹介されている。さすがに昭和十二年のパンフで、「全發聲」の文字が不思議な力強さ、右からの横書きの「原作 山本周五郎」も重々しい。作戦大成功でデビュー後の人気爆発。作る映画は軒並み大ヒットとなった。

この昭和十二年という年は、前述の日活に入った黒川弥太郎の人氣が女性層を中心に湧き上がり、東京柳橋の花柳界の女人らが後援会「藤柳會」を発足し、月刊の後援会雑誌「藤柳」も創刊されている。大友婦人会」の発想は、対黒川弥太郎の構図もあったのかもしれない。

新国劇大部屋時代の黒川と中富は勿論脇役同士ながら共演している。その後相次いで映画界への転身となり、それぞれに拠点を張り、ある意味ライバル関係になっっていく。当時の新興キネマ上映館の道頓堀「朝日座」のパンフも気合が入ったもの。表紙は看板スターの市川右太衛

門だが、中を開くと、大々的に大友主演「勤王田舎侍」が踊っている（左画像）。



さて歌人の千頭泰は「コスモス」に属し高知支部の代表でもあった。歌集『海彦』（昭和42年刊）は限定二〇〇部というレア物だが、その一冊をわたしも所有する。その実力は『昭和万葉集』にも数多くの掲載がある。実は本稿の先月に紹介した第十五巻の海音寺潮五郎作品《朝な朝な那珂の川瀬に霧立ちて那須野の夏のすぐるこの頃》の直前が偶然にも千頭の一首掲載であった。

ひるがへる波の穂さびし夏逝くと
 口の砂に鴉むれつつ 千頭 泰
 実直に働く姿、自然詠にもすぐれる。

千頭泰は昭和二年生まれで歌集『海彦』

刊行時はちょうど四十歳の不惑であった。歌集は縦長の文庫変形サイズで本文は約60ページほどながら、美しい一色の色刷り扉や挿画も入る非常に手の込んだもので、しかも珍しい孔版刷り（いわゆるガリ版）で収録歌数百五十首。題字を田谷鏡が担当している。繊細な題字が、ブラックの表紙に、或いは濃紺の扉にシルバーで浮かび上がる見事さだ。更に口絵・渡辺啓介、装釘・今戸武雄、印刷・堅田政雄と記し、

扉の題字を敬愛する先輩田谷鏡氏に戴くことが出来た。（略）全て友人達のオールハンドメイドで出来上がったことも嬉しい（略）

と「後記」にある。手作り感一杯の限定二〇〇部だったのである。

『昭和万葉集』十三巻には『海彦』から、手を洗ひ吾は坐りぬ平凡に夕食を待つ一人となりて

風呂に焚く板それぞれに木のほひもてるを秋の日にひろげ干す

など八首が掲載されている。

千頭泰は若い頃からこうした本作りを得意としていたのである。「大友柳太朗覚書」の載る雑誌「幻燈我楽多館」にしても、何とも楽しげな映画の雑誌であり、表紙には味のある千頭自身の絵。この号は平成五年一月刊だが、巻頭に「大友柳太朗覚書」を書こうと思ったのは、いつも送られてくる古書目録の中で、一冊の歌集が目についた」からだとして、歌集『渚』 大友柳太郎（中富正三） 昭和十四年刊

をあげて、
いわゆるタレント本として際物めいたものが多いが、戦前のこんな時期に、しかも売れないことでは定評のある歌集となると意味は全く違ってくる。

と言ひ、早速『昭和万葉集』を調べたとあるのも、何かわたしにこの歌集を譲ってくださった高橋輝次氏の話の思い出させる。高橋氏が歌集『渚』を古書目録で発見した年より更に三十年ほど前にも、大友柳太郎の『渚』は古書業界に流れて

いたのであった。

新興キネマが最初に欲しがったという宮本曠二郎だが、生涯新国劇の中で過ごした。知る人の話では太刀さばきの巧みさは際立ち姿も美しかったとある。戦後の時代劇が復活した一九五四〜五五年にかけて新国劇の俳優が中心になり日活で制作された映画が幾つかある。「国定忠治」「平手造酒」「関の弥太っぺ」等舞台でお馴染みのものだが、その全てに宮本も出演する。あくまで脇を固める一人としてだった。新国劇で認められ大いに重用された宮本でさえも、辰巳柳太郎や島田正吾と別路線を行くのは難しいのだ。舞台と映画では抜本的に違うものなのか。一九六九年大映制作の「人斬り」（五社英雄監督）にも宮本は辰巳と一緒に出演する。辰巳は冒頭で刺客数名に惨殺される吉田東洋役、宮本も勝新太郎の演ずる岡田以蔵が野球のバットなりに振り回す刀に斬り殺される渡辺金三郎役。演技は見事だったがさして重たい役ではない。

編集
後記



▽編集後記欄下の「出詠者数の動向」だが一月号から始まり早半年、カウンター「の数字が一月号と同じ一〇七名である。この間亡くなられた方、体調不良による休詠の方などおられるが入会された方もあつて心強い。休詠の方はお元気になられたらぜひ作歌を再開していただきたい。

▽今月は大山敏夫氏執筆の「大友柳太郎『渚』鑑賞補記の3回目。新しい情報が満載だが大友の歌集『渚』に早い時期から注目していた歌人が存在していた事実には驚いた。その歌人千頭泰は映画雑誌の編集人としても活躍し、自らの歌集もガリ版で作ったという。大友が映画界で活躍し始めた戦前の時代に思いを馳せつつ興味深く読んだ。

▽本号には桜を詠んだ作品が見られる。鑑賞しつつ花見の頃を思い出している。
(桜井美保子)

▽今月は五十嵐順子氏から新作五首を頂戴した。氏は伝統ある歌誌「歌と観照」の編集人であるが、小誌創刊六十周年記念として刊行した「四斗樽」にいち早く注目して下さり、たくさん注文して頂いた。この新作も、過去回想の助動詞「し」の使い方工夫されている。会員諸氏もよく読んで学び取って頂きたい。

▽高橋輝次氏のコラムの二回目も興味深いものであった。永年のジャーナリストとしての経験から引き出される話は、面白くそして納得もする。高橋氏は小誌編集部の手間を省く意味から、原稿は実の弟さんのパソコンを通しての入稿で完璧なものである。今回は最初の画像にやや不完全が見られたが即対応し作り直して下さった。何うと弟さんも出版畑の方で、業務がら携わったDTPに興味を抱いて編集者かオペレーターか分からぬようになつたと仰有つている。この話は、同様に身近にあったDTP技術を見よう見まねで習得した私に似ていて驚いた。(大山敏夫)

▽今月の応接室にお出で下さったのは五十嵐順子氏、お名前は総合誌などで拝見していたので笑顔の写真にご挨拶させて頂いた。お住いの我孫子市は私の利用する亀有駅から三十分程の距離。「将門の井戸」には古い戦の伝説があるようだ。

▽高橋輝次氏の「作家と編集者の微妙な関係」を読ませて戴きながら学ぶことが多くあった。長く続けているので選歌や添削なども担当しているのだが漢字とか仮名遣いの訂正は別として難しいと感じることがある。その都度思うのは「下手でも良い。自分の歌を」という会のモットーである。当り前のことだが作者の思いを正しく読み取って残したい。

▽三月の川越歌会に参加し、久しぶりに学びの時間を過ごさせて戴いた。御礼申し上げます。

▽新入会紹介
塩野 伸氏(紹介井上菅子様)
鈴木知子氏(ホームページ)
倉田ひろみ氏
(小林芳枝)

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。(代表は大山敏夫)
 - 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。(事務局は副代表を兼務)
 - 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
 - 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
 - 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
 - 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
 - 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
 - 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
 - 一、会費は年額(購読料を含む) 次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。
- *会費は原則として振替にて納入する事。
- A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
 - B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
 - C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
 - D 維持会員(二部購入) 二六〇〇〇円
 - E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。
 - 一、担当選者は原則として左記。
冬雷集・作品三欄(メール投稿分)
・担当 大山 敏夫
・担当 桜井美保子
作品一欄
・担当 小林 芳枝
作品二欄・作品三欄(手書き投稿分)
・担当 小林 芳枝
・担当 小 林 芳枝
 - 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
 - 一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。
- 《Eメールでの投稿案内》
- 白地に一まずつべた打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
- 一、Eメールによる投稿は左記で対応する。
大山敏夫 tourai-ooyama@nifty.com
小林芳枝 kysie@nifty.com
桜井美保子 mhoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2026年6月1日発行

編集発行人 大山 敏夫
データ制作 冬雷編集室
印刷・製本 (株) ローヤル企画
発行所 冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話 090-2565-2263
事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替 00140-8-92027
ホームページ http://www.tourai.jp



小誌QRコードです。ここから入れます。

頒 価 700 円

今月の冬雷 (冬雷カウンター) 出詠者数の動向				
冬雷集欄	作品一欄	作品二欄	作品三欄	総数
34	29	30	14	107
(0)	(0)	(0)	(+2)	(+2)

*上記は対前月比です。これは即ち、現冬雷の体力数値と言えます。